

は妖精の群れる一つのオペラとなつた」のである。

既知の世界、既知の組織の破壊より、他の世界、未知の世界への伸展確立の間に當然經べき混沌状態がある。これが極めて急速にまた一時的にその混沌状態を經過するが故に、その急速な物象の多様な姿に接しては、不可解とも讀者は感ずるのである。そしてランボオの表現の特色の一つであるといつても言はるゝ「具體的より抽象へ忽然の經過」も實は、この既知と未知との兩界の通過を示すものである。

何人でも青年期に於いては一種の危期を通過する、内心の反逆革命を經驗する。それをランボオは代表して、またそれを痛烈に感得すべき時代に於いて、社會環境に於いて、何人よりも激烈に、しかも四五年といふ短期間に於いて、ポオドレエルが一生かゝつて求めた「未知の世界」、「交コレスポネン通」の世界を、またヴェルレエヌが身をもつて探した音樂的諧調の世界を、壞廢、混沌、到達をもつて、浮び上らせたのである。その苦惱、その攪亂、その狂態は、恐らく非常な嵐の如きものであつて、彼はその一生をこの短期間に集注したと考ふべきであらう。

彼の最後の代表作は、「神シムボル秘」である。「巨きな青い眼をした、雪白の姿せる神の如く、海と空とは、大理石の露臺へとて、若き強き薔薇の叢花を引きつける」世界は、明るい朗かな新たなる秩序をもつた世界でなければならぬ。破壊、混沌、神祕、新秩序、ポオドレエルは「航海」によつて、遠くその世界へと志し、ヴェルレエヌは「何よりもまづ音樂」によつて、その世界を現出せんとし、ランボオ一

人は、極めて短期間に、爆發的に、それを經過して來てゐる。その短い集注的な従つて力強い主觀的革命的な精神と、それに伴つた表現とは當然後に來る人々に強い感化を及ぼさずには居られないのである。その著名な一人に「詩人とは宇宙に秩序を與ふるものである」と言つてゐるポオル・クロオデルがあり、コンミニストの文藝家の主長、「クラルテ」の作家アンリ・バルビュスの如きも、このランボオの現代文藝に及ぼせる影響を明瞭に認めてゐる人である。

まづもつて象徴主義文藝とその代表者として、そして後來に最も多く影響を及ぼしたアルチュール・ランボオの大體の傾向を知つて置くことが何よりも大切な事と信ずる。

### 三、自然主義文藝

自然主義文藝は象徴主義文藝と共に、十九世紀末の壞廢期を代表する文藝表現である。従つてこの派の文藝が取材とするところには、ブルジョワ生活の爛熟壞廢の姿が一面には見らるゝと共に、他面には資本主義の支配する社會生活の中に芽をいだして來る労働者との争闘、労働者の覺醒がその内容にとり入れられて來てゐるのである。それ故象徴主義に現はれた動物性といふ如きものが、この派の文藝には一層露骨に、一層散文的に描寫せられてゐると共に、初めて文藝の中へ労働争闘が主題に供せらるゝことにもなつて來たのである。象徴主義に於いて個人生活の立場から個人の深奥意識の底を開いて、或る未知の世界を浮びあがらせるといふことは、それを社會的集会的に見れば、從來の文化に浴



することの出来ない、全く従来の文化の建設には深い深い地中の土臺石にのみ用ひられて、自分等の上で打ち建てられた文化の華は絶対に享樂することをゆるされなかつた労働者、無産者の階級を解放して、初めて天日の下に太い呼吸をなさしむるといふ事になるのである。此處に全く新しい、未知の世界が開かるゝといふべきである。

一體文藝の内容は、神か人かの區別のつかぬ所謂神話の時代から、英雄が主人公であり、王侯貴族が中心人物であり、やがてブルジョワジイが作品中の主人公として活躍し、十九世紀末にいたつて初めて、労働者、無産者が文藝内容の中心人物となりかゝつて來たのである。

自然主義の文藝はその意味で、従来の如何なる種類の文藝よりも新しい内容を持つものであるといふ事は出来る。併し勿論、この文藝が発生する階級はブルジョワジイの階級であつて、いまだ目醒めたる無産者が階級人としての表現を持つたのではないことは言ふまでもないことである。けれど世紀前半の文藝たる浪漫派の文藝が若き希望を持てるブルジョワジイの自由なる文藝であるのに對して、自然主義文藝はその同じブルジョワジイが成熟し爛熟して壞廢の姿を示し始めた時期の文藝であり、従つてその中へは、そのブルジョワの統制では押へきれない一種の新勢力が擡頭し初めたといふ事實は見のがすことは出来ない。ゾラの「ジェルミナル」がその意味で歐羅巴に於ける新時代を開く一つの曙光として算せられるのも當然の事である。

即ち象徴主義の文藝が個人意識に於ける端的な、壞廢、混沌、神祕を経験してゐることを、自然主

義文藝は、社會的に、一般的に、一層平明に、一層露骨に一層具體的に敷衍せしめてゐるものであるといつてさしつかへない。フロベールは「ボヴァリイ夫人」に於いて、田舎ブルジョワの主婦の典型を描きだして、野心と、虚榮と、肉慾とを露出せしめ、モオパッサンは、その弟子として、ブルジョワ女性の細かな心理と情慾の動きとを描き出し、ゴンクワルに到つては、その細緻なる觀察と、微細な筆致とは、全く化學者の實驗と、方程式を作り出す程の綿密な注意とをもつてゐる。ゾラの實驗的な觀察方法は、人生をラボラトリーの如く考へて、事々に經驗ばかりでなく、實驗を加へて觀察して行くのである。ゾラの實驗は或る場合には醫者の患者を取扱ふ如く、或ひは探偵が犯人の跡を追ふ如く、細大残さず八方から觀察を集める。遺傳を、友人關係を、日常生活を、家屋の構造、その周圍の天然現象にいたるまで、全く人間を一個自然の生物として、その發生狀態を研究し報告するのである。

かくてゾラの「第二帝政下に於ける一家族の社會的及び自然的歴史」たる「ルゴン・マカアル」なる一大組織を持つた物語が成立せしめらるゝのである。これはバルザックの「人間劇」の大組織と共に、佛蘭西人の如何に建築的素質を持つてゐるかを知るには最も好き例證である。この「ルゴン・マカアル」の中には、政治家も、財政家も、商人も、軍人も、僧侶も、職人も、坑夫も、召使人も、百姓も、凡ゆる階級を包括した現代歴史がある。従つてその中にはブルジョワ社會の崩壞も、新興階級の發芽も、かゞひ知ることが出来る。ゴンクワルはその日記の中で、「現在の物語は、歴史が文獻から作らるゝ如く、自然に即して語られ、自然から採用したる文書で作られる。歴史家は過去を物語るものであり、



物語作家は現在を物語る」といつてゐる如く、ゾラの作物でも、ゴンクウル自身の作物でも、現在歴史であるのである。更にアナトール・フランスにしても、あの四巻のベルジュレ教授の時代と共に、思想の變化を來たす物語には、「現代歴史」と銘を打つてゐるのである。なほ更に、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」十巻にしても、世界大戦前の佛蘭西人の或る一部の心理過程の生きた歴史とも見らるゝのである。

ゾラのこの大組織の「ルゴン・マカアル」の中では、<sup>ラフモワール</sup>「居酒屋」(1877)と、「ジェルミナル」(1885)とが代表傑作とせられてゐるが、そしてその中にまた新興階級の發芽が見らるゝとせられてゐるが、その他の多種多様の人物にいたつては、ブルジョワ社會の崩壞のきざしを示す如く、多少の度は異なれ、いづれも幾分づつの病的な姿を呈してゐるのである。

ゴンクウル兄弟はその作品「ジェルミニイ・ラセルトゥ」の序文で、「普通選舉と、デモクラシーと、自由主義との十九世紀に生活して、下層階級と人の呼ぶところのものが、物語に對して權利を持たぬであらうかを自分等は反省するのである」といつてゐる。そして或る下婢の哀れな悲しい生活とその性慾とを描いてゐるのである。これも文藝の内容の上からいつて、新たな種類の人物が、中に取入れられた點に於いては、生新なものであるには違ひないが、社會的立場からいへばブルジョワ自由主義、民主主義の見地から、従來の文化から隠されてゐた人々を起用したといふに過ぎない。ゾラの態度にしても大體同じことである。けれど、科學的な平等觀をもつて人生に對するといふ態度で、一方には人

間生活を自然状態に於いて觀察し、性的現象をも科學者の見地で取扱ひ、人間心理も科學者の態度で研究し、他方にはまた社會的にこの科學的平等觀を及ぼして、社會生活上の缺陷に喰ひ入つて行かうとした點は、従來の文藝よりは一步進んだ生新な態度と言はねばならぬ。そしてその結果は一方にブルジョワ生活の内面的な崩壞病的現象を摘發し、他方に資本主義制度の缺陷を暴露する働きをして來たことは認めねばならない。そして同じ自然主義の作家の中でも、モオパッサンは自分が解剖し分析したブルジョワ生活の凡俗卑小な雑駁さに耐らないで遂に氣が狂うて自殺せんとし、ユイスマンスは科學的現實の前に耐へきれなくなつて、丁度象徴主義の詩人等が經過したと同じ過程を経て宗教的神祕の境へ遁入してしまつた。

要するに、象徴主義といひ、自然主義といひ、十九世紀後半より世紀末にかけてのブルジョワジイの社會生活から發生した文藝であり、そのブルジョワジイの成熟壞廢を暗示してゐる文藝であり、そしてその中に現はれてゐる爆發的な革命的な勢ひと、科學的な平等觀的な社會觀とは、何としても、十世紀初頭の文藝に影響を及ぼし、その勢ひの伸長、その平等觀の伸長は、様々な動波の中に、反動となりまた正動となつて、姿こそ變はれ、それと見ずにはゐられない。

#### 四、反自然主義文藝——傳統主義文藝

ゾラの實證的な觀察研究によつて人間心理を確かめようとしたのに第一に反對したのはポオル・ブ



ウルジである。彼は眞に科學的であらん事は求めるが、決して所謂科學主義者ではないと自ら言つてゐる。彼の小説「弟子」はこの反自然主義文藝の態度を最も明瞭に具體的に示したものである。ア  
 ンドリアン・シクストといふ學者、おそらく批評家テエヌを作中に假託したものかも知れぬ、この學者の實證主義の弟子にロベエル・ゲレルウなる若者がゐて、人間心理を實驗的に觀察する對照として、自分の友人の妹シャルロットが自分に戀ひしてゐるのを知つて、自分もまた戀人としての言葉を用ひ、次第次第にその相手の心證の變化し深酷になつて行くのを仔細に觀察して行く。やがて遂にその娘に迫つて身をゆるすことまでに立ちいたる。けれどカトリックの娘はその處女性を守ることが信仰の強さと同じことである。結婚生活にいらざしては、身をゆるすことは死と同意味である。然るにゲレルウは實證心理の研究者として、一意その對象者の心理を、試験管内の藥品の反應を知らんがためにするが如き、實驗的態度に終始してゐるのである。娘はつひにそれがため自殺してしまふ。けれどその自殺に疑ひありとして裁判所の問題となり、ゲレルウは訊問せらるゝのであるが、その娘シャルロットの兄、即ちゲレルウの友人は自分の妹の自殺を證明して、友人ゲレルウの罪無きを主張し、やがてゲレルウは免されて、裁判所の門を出るのであるが、その門前で待ち受けてゐた友人即ちシャルロットの兄は、ピストルを突きつけて、法律上には罪はないけれど、道徳上の罪人として妹の仇をその場で倒すのである。この若い實驗學の學徒ゲレルウの師たるシクストは、その弟子の死に接し、その通夜に臨んでゐる間、或ひは自分の學説が誤つてゐはしなかつたかと思ひまどふ。そしてパスカルの言葉、「お

前が予を見出さなかつたのは、お前が予を探し求めなかつたのではないか」といふ問ひを思ひ浮べて涙を流さずにはゐられなかつた。予とは神のことである。——この物語が出版せられた時、テエヌは作者ブルジエに書き送つた。「たゞ一つの結論に到達する、それは興味は變化し、我が時代は終つたといふ事である」と。ブルジエはそれに答へて、「いや、けれど全然終つてしまつたのではない」と。いふ意味は科學は大切である、けれど所謂科學主義は危険である。自然科學と人間科學とは當然區別をつけなければならぬ。所謂科學主義は正當に考へ、正當に働くといふよりは、思考と行爲とをもつて戯れをするディレッタントニスムへ人々を導く危険があるとブルジエは考へるのである。「弟子」の如き振舞ひをするのが即ち彼によればディレッタントの行爲であるといふのである。更に彼によれば所謂科學主義は人間を鐵の如き因果の鎖につなぎとめて、如何にしてもそれから脱出することの出来ない絶望の境地に陥れる、病的悲觀に追ひ込んでしまふ。モオパッサンの如き強健な大才でもそれがために弱らされ、ユイスマンスの如き鋭い才能の人をも毒してしまふ、「我々の如き科學主義者の直接の弟子たるものは、先輩等の過誤を正して行く義務がある。それは科學を否定することでは決してない。科學主義萬能の過誤を正すことである」といふのである。

こゝに全く自然主義に對する反動的な文藝運動が生じて來たのである。この反動的な文藝運動は科學に對して宗教を立し、崩壞混沌と神祕を導き、其處に一つの新らしき秩序と統一とを見出さんとする要求である。カトリックの復活は勢ひ傳統の目醒めとなつて來る。千八百七十年戦争によつて戰敗



の憂き目を見て、一國としても一個人としても立つ瀬のない廢退苦惱を味はつた佛蘭西人は、此處に宗教と傳統とによつて新らしき國民主義を立てて、崩れたる足場を立て直さんと努力しだしたのである。ブルジョワジイスムの一時的盛り返しと見る可きであらう。獨逸といふ一國を常に傳習的な敵國と考へてゐる佛蘭西ブルジョワにとつては、軍備その他、目に見える實際上の設備は十分に整ふことは事情許されなかつたけれど、それだけ内心に於いては、覺悟をきめてゐなければならなかつたのであつた。それが宗教の復活と傳統の覺醒とによつて、或る統制を持ち來たすことになつたのである。「科學と宗教」といふこと「自然科學（シヤンズ、ナチュレ、シヤンズ、ユメニ）と人間科學（シヤンズ、ユメニ）」との對立はこの期間に於いて、哲學者ブウトルウによつて、批評家ブリユヌティエルによつて、或ひはルナンとベルトロとの間に於いて屢々論ぜられた問題であつた。そしてブリユヌティエルは敢然として「理性の破産」を宣告し、所謂改宗によつて、宗教に入り、傳統の威力を力説せずにはゐられなかつた。「傳統とは、彼によれば、人間の最もよき經驗の徐々に蓄積せられたる堆積である」のである。そして現在を支配するものは過去から堆積し來たつたこの最もよき人間の經驗であるのである。それは偏に自然科學的であるのでなく、即ち偏に理性によつてのみ判斷せられない力であるといふのである。科學（シヤンズ）に對して良心（コンシヤン）をもつてし、自然科學と精神科學とを對立せしめ、その精神科學の統一によつて新たな心理組織を立てんとするのである。具體的にいへば宗教的統一のもとに心理組織を立てんとするのである。ベルグソンの哲學はこの精神科學の最も鮮かなる展開である。

モオリス・パレスの自己崇拜から國民主義への展開も、ジュール・ルメトルや、ルネ・バザンなどの郷土愛も、アンリ・ポルドオなどの地方色も、さらに新浪漫派といはるゝロスタンの如き文藝家も、いづれも傳統主義のこの反動的な流れの中に存在地位を占めてゐる人々である。

傳統主義の文藝は國民主義、祖國愛、宗教情緒の復活、さらにそれ等のものが旺盛に繁榮した古典主義文藝への歸嚮を示すやうになつて來るのは自然である。情熱の初めての解放を悲劇の中に湧出せしめ、希臘美とキリスト教情緒とを融合せしめて、均整な階調を示したラヌイヌ劇が、全體として當代の社會生活の社會批評を具體化してゐるモリエルの喜劇が、遠く系統を引いて復活の呼吸を通はし、遠く影を投じて、その陰影のなかへ現代人を包まんとするやうにもなつて來るのである。ブルジョワジイスムはこの古典主義の遠い投影の中に包まれて、一時貴族的な最後の輝きを示してもするが如くに見らるゝのが、二十世紀初頭より大戦争に到るまでの劇文學の大體の傾向であつた。自然主義への反動の傾向は、その表現の上からいへば新浪漫派、その精神の上からいへば新古典派の文藝と總括して呼んでもさしつかへなきものであつた。さらにその傳統の根源とも考へらるゝ統一源泉として王政の復興を夢想し、企畫し、それを政治上の問題にまでも持ち出して、「アクシオン・フランセズ」の運動となり、シャルル・モオラス、レオン・ドオデの如き人々まで出づるやうになつたのである。そしてこの王黨の運動は今日でも持續されつゝある、然かも可成り有力に開展しつゝある現象である。

千八百九十七年のドレフュス事件なるものが又、この期間に於いて、全佛蘭西の文藝思想家を全く兩



分して、對立せしむるやうな形になつたのである。これは或る一人のジユテア系の砲兵士官が軍機の秘密を獨逸へ賣つたといふ嫌疑のもとに、犯罪の宣告を受けて地中海の或る島へ流刑に處せらるゝ事となつた。その事件のために、輿論は全國的に喚起せられ沸騰して、非常なる言論界の騒ぎとなつたのである。

一方にドレフ、スに味方する人々、ツラ、ジャン・ジョレス、アナトオル・フランス、ロマン・ロランの如き人々は、單なる嫌疑のために人を罰し、しかもその人がジユテア系の人であるといふが故に、人種的の偏見をもつて臨むが如きは非常なる誤りである。一國のために正義を犠牲にすることは出来ぬ。正義を飽くまで立する事が即ち佛蘭西自身のためでもあると主張するのに對し、他方にはモオリス・パレス、或ひはシャルル・モオラスの如きは國民多數のためには犠牲も忍ばなければならぬ。軍人にして既にかゝる嫌疑を受くる如き振舞ひをなすのは誤りである。まして獨逸人ならば敢てかゝる誘惑を試みることも當然あるべきである。ドレフ、スを罰するは間接に敵國を罰することであると論じ、兩相對峙して譲らず、少くもこの事件のために、一般人は、獨逸なる敵國の存在と、人種的偏見と、國民主義と超國民主義と、正義と犠牲との觀念を明かに印象せしめられたことは事實である。そして文藝の上にも國民主義傳統主義の文藝と國際主義或ひは世界主義の文藝との明かなる分野が現はれ出して來たことも事實である。この事件は、その後の種々なる文藝作品の中に材料として取入れられてゐる。アナトオル・フランスの「現代歴史」の中に、ボオル・ブウルジェの「レタップ」の中に、モオリス・パ

レスの「根を斷たれたる人々」の中に、ロマン・ロランの特に最近の作「魅せられたる靈」の中に現はれてゐる。少くもこの事件に際會して、文藝家はいづれとも、はつきりした態度を取らずにはゐられなかつたのである。

少くも千九百十四年の大戦にいたるまでの間の文藝家の思潮は大體この二つの傾向の對立として考へらるゝのである。左に自己崇拜、民族主義の典型的代表者を擧げてその解剖を試みて見よう。

### 五、個人主義より民族主義へ

以上の如き傾向の中に於いて個人主義或ひは自己崇拜より民族主義へ開展して行つた代表者はモオリス・パレス(1862—1923)である。彼の出生はロオレヌ州であり、父系は佛蘭西中央のオヴェルニュ人の信仰厚き系統であり、彼の容貌はオヴェルニュ人たるバスカルの死面に酷似してゐる。宗教的な敬虔な情緒を自らも持ち人にも與ふる人である。彼が青年期に心に銘した言葉は、フィテの「人間は自分のために生きねばならぬ、即ち自己の生活機能の最も完全な開展のために生きねばならぬ。」といふ語と、ボオドレエルの「自己にとつての偉人、聖者とならねばならぬ」といふ詩の句とであつた。個人主義のブルジョワジイズムの漸化した金言である。彼の自我崇拜の三部作、「蠻人等の眼前に」「自由人」「ペレニスの園」はこの自我の發展の跡を語るものである。この三部を通じての主人公はフリップである。フリップは田舎の學校で業を卒へたのであるが、振返つて見れば自分の内心に於いて何れも得たも



のではない。生活の法則も何も與へられはしない。唯一つ残るものは「自我」のみである。「自分は書物の最後まで來た。けれど何人が自分に恩恵を與へるであらう。」周囲を見廻せば自分は蠻人等に取りまかれてゐる。「蠻人等とは、即ち自我以外のものである。自我そのみが唯一の眞實である。」然らば如何にすべきか、自我を克く知れ、自我を深めよ、自我を大きくせよ、外界といつても實は自我の作りいだすものである。そこでフィリップは、「自由人」として自我を知り、自我の本質を突きとめんがために、凡ゆる感覺の刺戟を受けて、その刺戟に應じて動くことに定めて、二の法則を立てた。(1)我々は感激のなかに於けるほど幸福なことではない。それ故、(2)この感激の悦びを増大せしむること。それ故、結論として、(3)出来るだけ多くを感ずると同時に、その感じたことを解剖すること。これを實行して行くことは、毎日の生活を狂激なものにして行くことである。刺戟によつて生き、感激の擴大によつて生き、同時にそれを解剖することである。この生活は狂ほしい、同時に非常な疲勞を來す。かくして「自我」に直面し、「自我」を働かせて見たところで、その招來するものは狂激と疲勞とだけである。やがては倒るゝばかりになつてしまふ。

その時、またフィリップの胸にひびいて來たものは、フィフ・テの語である。「幸福とは、本位のなかに於ける休息と集注とである。不幸とは變化多様のなかに融没してしまふ事である。」さらばその本位の生活とは何であるか、それは何處にあるか、フィリップはまたこれを求むるのに悩んだ。苦しんだ。少くともこれは「自我」からの、今まで大切に尊崇して來た「自我」からの脱出でなければならぬ。

その時、彼の胸には又ゲエテのフワウストの語が響いて來た。「そんな悲しみなんかと戯れてゐることはやめてしまへ。それは禿鷹の如くお前の命を喰ひつくす。いかに悪い仲間であつたとしても、お前とても、多くの人々と共にゐれば、一人の人間であると感じることが出来るであらう。」といふのである。無理解な蠻人共の中にあるとは自己陶醉者のいつも感ずることである。その感じを轉倒せよ、お前がいかに悪伴侶ども他の人々と共にゐれば、やはり人間らしい感が味はれようといふのである。

そこでフィリップはロオレエヌを出て、南方の國、明るい光の國、歴史の影の漂ふ國へ行くことにした。この古代の睡つてゐる廢都のなかで、かつて聖ルイが十字軍を引きつれて出發した海港に於いて、フィリップはベレニスと呼ぶ健康な、自然そのものの如き、併し舊き傳統のなかから生れて來た一少女に出逢つた。この少女は自然の如く快活で、語ることは舊い聽き傳へた昔物語ではあれど、同時に彼女は現代の空氣を呼吸してゐる生きた南國の娘である。丁度その南國の都市が古代の歴史の中に埋もれながら現代都市の設備を兼ねて繁榮してゐる如く、この少女ベレニスの中には古代も過去も現在も共存して生きてゐた。フィリップはこの古都の歴史の中から生れ出た一輪の花の如き少女に接して、深い一種の目醒めを覺えた。それは戀といはんよりは更に深い目醒めであつた。彼は過去にも甦れば、同時に現在にも目を醒ました。それはフィリップにとつては民族心の目醒めであつた。

オギニスト・コントの「現在を支配するものは過去であり」、「各個々人は全的に社會へ從屬しなければならぬ」といふ哲學を個人的に具體的に經驗したのが即ちこのフィリップの經驗である。そしてこの



ベレニスなる少女は、作者バレスが後に書いた「コレット・ポオドオシユ」なる作中のコレットなる少女に伸展して、佛蘭西精神の權化となるのである。

兎にかくバレスの自己崇拜はこの三部作を通じて、民族心に到達することによつて、孤獨我を脱却して、共通我の一部に到達した。他の人々と共にある一人間となつて來た。望郷の嘆き、ノスタルジイに泣いてゐたものが、郷土の思ひ出をたどつて、衆人の中へ歸つて來た姿である。「個々人なるものは、いかに完全に想像しても、民族と呼ぶ一層完全なる組織の斷片に過ぎない」といふことに氣がついたことである。と同時に、バレスは「解剖することは即ち活動することである」を標語として、彼の政治活動を開始して、二十七歳で代議士となつた。總て、彼の第四回目の物語「法の敵」が現はれた、この作の主人公はフィリップではなく、アンドレ・マルテルである。マルテルは社會組織のいかがあるべきかを研究してゐる。殊に獨逸の社會主義と獨逸人の感知性とを確かめんがために獨逸へ行く、そしてラッサアルをマルクスを研究し、自國ではフウリエをサエン・シモンを取調べる、が満足せられない。何故ならば彼の求むるものは祖國の衆人と共に生きる強固なる生活觀を打ち立てん事を求め、道徳上の健康性を採り歩くが故である。そして大方の無政府主義者が到達する如く、このマルテルも未だ、「世界が求むるものは新らしき法則ではなくて、新らしき精神状態である、物質的改革でなくて、道徳的改革であるといふ結論に到達する」以上四冊をモオリス・バレスのディレクタンティスム或ひは唯美主義の現はれと呼ぶべきである。

やがて彼の「國民的精神力」と呼ぶ三部作が引き續いて來る。「根を斷たれた人々」、「兵士への呼びかけ」、「我等の面影」がそれである。この中で「根を斷たれた人々」はロオレエヌ生れの七人の青年が田舎で學業を卒へて巴里へ來る。そして各自がいづれも苦惱の生活をしてゐる。その中でスチュレルといふ青年がこの作のみならず、三部作を通じての主人公である。彼と「自我崇拜」の三部作の主人公フィリップとを比較すれば、スチュレルは一層實際的である。フィリップは唯我主義と唯美と夢想との中で生成し、スチュレルは森林中の一本の樹木の如く、人間の森林たる都會の中で、周圍に順應して身をもつて働きつゝ生きて行く。フィリップを導くものはルナンであり、スチュレルを導くものはテエヌであり、テエヌはこの作中に姿を現はしてスチュレルを教へもする。そしてこの二人の青年は共に自分の受けた修養について不平を述べてゐる點は一致してゐる。それは浪漫主義とカント主義とである。浪漫主義は感知性を掻き立てるばかりで實用に適せざる人間をつくる。カント主義は茫漠たる道徳法を教ふれども空虚であつて、その空虚なもので生活を制限し、地平線を閉してしまふ。

二人は同じ事の不平をのべ合ひ、一人はルナンによつて美と宗教とによつて祖國愛へ、他はテエヌに導かれて一層實證の世界へ入れども、これもまた同じく種族心の目醒めを具體化して祖國の有用な人物として生きる生活に向ふのである。

やがて作者バレスの「東方の稜塞」と呼ぶ最後の二部作或ひは三部作が續いて來る。「佛蘭西人の友情」を入れれば三部作となり、然らずば、「獨逸の服務へ」と、「コレット・ポオドオシユ」とで二部作



となる。この最後の作がこの叢書の傑作であり、作者の人気を最大に持続したものである。七十年戦争で獨逸の所有に歸したメッスの市へ、獨逸本國から或る若い留學生が来てその舊い都で佛蘭西の文化を研究しようとするのである。その男は或る佛蘭西人の家庭へ寄寓した。老婦人と娘との家庭である。その若い獨逸人は舊都の佛蘭西文化と共に、生きた佛蘭西人に接してゐる間に、次第々々に佛蘭西化せられて、やがてその娘に結婚を申し込んだ。けれど彼には本國に許婚の娘があるので一度歸つてよく考へて来るやうに老婦人にすゝめられて歸國するが、終にその婚約を破つて佛蘭西娘に愛を求めて来るのである。けれどその娘も老婦人も急ぐことはない、徐々に時期をまつことにしようとして、日曜日には三人連れ立つて、會堂へ行き彌撒に列し、或ひは近くを散策して、舊都の文化の研究を續けてゐると、或る日曜日に會堂へいつもの如く彌撒に行つてゐる最中、その娘コレットは不意に、鐘の音や、オルグの響や、祈禱やを耳にし、香の薫りの立ちこむるのをかいである中に、不圖或ることが胸に閃くを感じた。これこそはカトリックの傳統の目醒めである。自分の側に坐してゐる若い獨逸人は眞心から自分を愛して呉れ、また自分もこの人との結婚以外にはこれほどの幸福は得られないであらう。けれど、このカトリックの傳統の精神が果してこの獨逸人に了解せらるゝだらうか、それは不可能なことである。これこそは佛蘭西人のみの持續して來たキルチユルである。この了解なくしては如何なる愛も幸福をもたらすことは出来ぬ、そこでコレットは連れ立つて會堂をいづる時、はつきりした言葉で、その若き獨逸人に自分との結婚は斷念するやうに通告するのである。

241  
畢竟パレスの脱我、及び宗教感に國境にまで伸びて、其處で止まつてしまつたのである。そして其處から引き返して祖國愛となり、舊い地中に埋伏せる傳統の靈を呼び醒して、それを鐘の音として空中に鳴りひびかせ、衆人をそれに歸一せしめんとしたのである。そして彼は千九百五年から千九百二十三年まで極右黨の代議士として巴里から連續選出せられ、戦争の起ると共に愛國者聯盟ライオン・パトリックを率ゐ、活躍したのであつた。

併し二十世紀の初頭より千九百十四年まで、大戦の始まるまでの間の佛蘭西に於いては、いづれにもせよ戦争の豫感が人々の意識を支配してゐたであらう事は、總ての方面に於いて察知せらるゝ。そしてパレスの諸作に見らるゝ如き思想情緒の傾向はまた佛蘭西の一半を支配してゐたであらう事も推知せらるゝ。象徴神祕の詩人ヴェルレエヌですらも、その晩年に於いては、「祖國の愛、それこそは第一である」とうたはずにはゐられなかつた。無論この中には宗教愛が籠つてゐる。パレスが戦争を思ふのは宛然宗教戦争の如く、戦死者は殉道者の如く思はれたのである。世紀初頭に於いては、モオリス・パレスとヴェルレエヌの書物とが最も多く賣れたとの消息はその當時の佛蘭西人の思考情緒の一半を明かに語つてゐるのである。

併しこれは右寄りの一半の現象である。同じドレフェス事件に覺醒せられたる人々の中で、正義を國のために求むると叫んだ連中は、寧ろモオリス・パレスが到達した處から出發したのである。ジャン・ジョレスは、「最もナショナルであるといふことは、インタナショナルであることではなければならぬ」と言



つてゐる。祖國愛を戦争に結び付ける人と、祖國愛を反戦争論に、また國際主義に伸展せしむる人と、さらに世界主義に脱却せんとする人とが生じて來るのである。次にこの代表者としてロマン・ロオランを考へて見ることにする。

### 六、民族主義より國際主義へ

ロマン・ロオランの青年期もまた當時の一般の青年と同じく苦惱の期間であつた。パレスもロオランも日本の文藝家でいへば、尾崎紅葉、幸田露伴とほぼ同年輩の人々である。ロオランはその青年期についてかういつてゐる。「どんなにか我々は悩んだ事であらう。そして吾々と共に多くの人々が。毎日のやうに我々の周圍には一層重い空氣が、頽廢した藝術が、不道徳な破廉恥な政治が累積せらるゝのを見た時、どんなにか我々は悩んだ事であらう。」又「我々は呼吸困難で、窒息しさうで、互ひに身をすりつけ合つてゐた。あゝ吾々は、共々辛い幾年をすごしたのだ。」一空氣は我々の周圍に重い。老衰した歐羅巴は壓迫する腐敗した空氣の中で癱瘓しさうだ——世界は小心な卑劣な唯我主義の中で呼吸を引きとりさうだ、世界は窒息する。」この苦惱は彼等當時の青年にとつて、共通のものであつた。そして詩人ポオル・クロデルはロオランと同學の青年であつたが、或る時ノオトル・ダムの彌撒の音楽を耳にしてゐる間に、言ひ難い力の身に感應するのを覺えて、非常な喜悅に目醒めたと告白してゐるのであるが、ロオランにとつては、救ひの手は、遠く北方より極光の閃めく如く射して來たのであつた。

それはトルストイより書き送られた手紙であつた。要するにその手紙の主旨は、人間のなすべき唯一の價値あることは、總ての人々を結合せしむることである。その反對は全く悪い。この結合の信念を基礎として、その犠牲者たるべき覺悟こそ文藝家たるものの持つべきことであるといふのである。

ロオランの理智主義による國際主義、友誼を基礎としての結合、眞實性の現はるゝ文藝を通じての諸民族の結合、個人間の道徳を移して團體間に植ゑ付けんとする努力、それ等はいづれもこのトルストイよりの手紙によつて基礎づけられたるものである。やがて彼は伊太利へ行き古代羅馬と共にルネエサンスの輝きに接し、同時に獨逸の革命思想家たるワグネル、及びニイチエ等の友人ウエゼンブルグなる老婦人に接し、獨逸精神を體得することが出來た。一體、彼の體內には母系から傳へられた深い信仰の念と、父系から繼承した革命の精神とがあつた。彼の祖父は大革命に参加して、人には見せなかつたが細かな當時の手記を藏してゐた。これが少年ロオランの人知れぬ愛讀のものであつた。

トルストイの感化、伊太利ルネエサンスの大才の輝き、獨逸精神の體得、革命、信仰、それがロオランを作りいだす要素であつた。やがて彼の最初期の作「信仰劇」三篇と、「革命劇」三篇とが各つくられた。そして若し何人でもが、ロオランのこの「信仰劇」の中に入れてある第一作の「アエルト」を、モオリス・パレスの「コレット・ポオドオシエ」と比較して見らるゝならば、私が前に言つた如くロオランはパレスの到達した處から出發した人であるといふ事を首肯せらるゝであらうと思ふ。パレスは自我主義より出發して、民族主義に流入到達し、ロオランは、祖國愛より脱却して理智的友誼的國際



主義へ伸展したのである。パレスに於いては信仰は同宗者の結合にすぎず、同じキルチュルを持つ者の團結であり、同時にそれ以外の者の排除である。ロオランに於いては宗教情緒は萬人を結合する一つの手段と考へる。それ故彼はいつもその手段を尊ぶ。目的は容易に達せられぬ、達せられても不満が多い。それ故手段それ自身を大切に考へずにはゐられぬ。革命とてもロオランによれば萬人を結合せしむる一つの手段である。從來壓迫せられ、抑制せられてゐた大衆が最もよくその力を伸ばし得るものは革命である。それなしでは大衆の力は伸ばし得られないと考へる。けれどこれも手段である。それは極めて大切に重大に考ふべきことと思考する。同時にこの大衆の出現を無視しては、萬人の結合は全く夢想に陥つてしまふ。文藝もまた萬人を結合せしむべき重大な役目を演じてゐるのである。彼はいふ。何人が、いかに敵對してゐるとはいへ、ゲエテやシルレルの描き出す眞實の獨逸人に對して戰爭をしかけようなどと思ふものがあるであらうか。トルストイやドストエフスキイの作中に現はるるロシア人に對して怒りを感じ、戰鬥を開始するものがあらうか。眞實の人間性は、風俗や慣習の相違をもつて現はれたにせよ、互ひに助け合ひ、互ひに救ひ合はうとする友情を感じるものである。この眞實性の現はれは、今日文藝を除いて他に求め得られない。眞の文藝はこの意味で、眞の人間同士の友情を結び合はせる効果を持つてゐるものである。我々は各國の文藝家へ握手を求める。政治的同盟は虚偽の結合である。眞の友誼の結合は文藝を通じてでなければならぬ。個人的の友情を團體間へ移す手段の一つとして文藝は重大な役目を演ずるのである。

彼の「ジャン・クリストフ」はいふ迄もなく、獨佛兩國の眞實性の披露によつて最上の結合となし、其處に眞の平和の第一歩を打ち立てようとする理想の世界への努力を現はしてゐるのである。所謂「戰爭の前夜時代」に書かれたるパレスの「コレット・ポオドオシエ」と、ロオランの「ジャン・クリストフ」とは、共に豫感せられたであらう戰爭に對する兩者の態度を具體的に示してゐるものである。そしてパレスは戰爭と共に「愛國者聯盟」を率ゐて立ち、ロオランは、スキスにゐて飽くまで非戰論を唱へてやまず、國賊呼ばはりもされても屈せずして、國境を超越し、戰鬥を超越して、世界の八方へ同志を求めたのであつた。「クレランボオ」(1920)はその期間の彼の心事を具體化した作品である。

理智と了解と友誼と結合、自由と平和とのこの理想主義はロオランディスムと呼ばれて、やがて嘗ての盟友アンリイ・バルビュスによつて論撃せらるゝにいたつた。ロオランとバルビュスの論戰は、理想主義と實證主義、自由と平等、手段と目的とに關する論争であり、國際主義と世界主義との争ひ、英雄的人道主義と共有的階級主義の分裂とも見らるゝのである。バルビュスを論ずる前に、暫くアナトール・フランスを見てみよう。

唯美主義、主智主義、七十年戰爭には巴里の包圍の中で、敵軍の砲聲を耳にしながら「ヴィルヅル」を讀んでゐた超越主義者のアナトール・フランスも、實は十八世紀式の一つの科學的追求めに身を委ねて、そして革命精神を奥深く眠らせてゐた人物であつた。時勢の速進とドレフェス事件の爆破とは同じく彼の心を奮ひ立てずには置かなかつた。同じ刺戟でも、その出發を心理解剖に於いて、人間心理の複雑は



情熱の自在な表出をする上流階級にあると考へて、取材をその方面にのみ求めてゐたポオル・ブウルジエにあつては、その刺戟から心理解剖を一層擴げて、單に情熱の錯雜を分析するばかりでなく、意識内容として、社會的義務を、信仰問題を取り扱ふ事に向つて來たのであるが、彼が何よりも深く持つてゐる古代の教養、殊に羅馬精神の支配的統一的な修養は、カトリシズムと結合して、傳統主義の確立に向はせたのであつた。然るに、アナトール・フランスに於いては、その刺戟が彼の博學を、彼の歴史的興味を、彼の科學的 pursuit を盡く驅つて、人文進歩の當然の歩みの中へ導き入れずには置かなかつた。

彼の「現代歴史」と題する四卷の物語は、その過程の生きた物語である。作中人物のベルジュレ教授は、もはや以前のシルベストル・ボナアルの如き單なる好古家、愛書家だけではなかつた。作者自身と同じく、ジョン・ジョレスと共に、街頭に出て大衆と行動を共にせずにはゐられなかつた。このボナアルとベルジュレとの間に置かるべき人物は、博學な懷疑的な牧師ジェロム・コワニヤルである。この三者を通じて見らるゝアナトール・フランスは、好學な、懷疑的な、主智的な、そして幾分アナリシクな、同時に十八世紀的なコスモポリイトが近代化せられて大衆の中へ出て來た人である。そして彼の世界主義は對象を天然に向けてゐる一種の理想主義である。「人間の最大價值は人間自身である。地球をして價值あるものたらしむるには、まづもつて人間を價值あるものたらしめねばならぬ。土地、鑛山、水、地球の凡ゆる實質、凡ゆる力を發掘利用するためには、人間、凡ゆる人間、凡ゆる人類でなければならぬ。地球の完全なる發掘利用は、白人、黄人、黒人の結合したる働きを要求する。」

傍觀者、觀察者、やがて實行者、これがアナトール・フランスの切實なる心理經過であり、いつも高い理想を持つて、徐々にその實現を考へ、時機の來るをまつてゐるのがロマン・ロオランの態度である。しかしいづれも理智主義者たることは脱れない。アナトール・フランスが死んだ千九百廿四年に、十年前に戰爭の發生と共に暗殺された彼の親友ジョン・ジョレスは、パンテオンへ葬らるゝこととなつた。恐らく彼も、アナトール・フランスも、いつかはゾラの如く、佛蘭西の光榮として、ジョレスと同じ、ゾラと同じ墓所を持つやうになるであらう。少くも彼のなかには、古典的美も、十八世紀的傾向も、十九世紀末の壞廢も、また二十世紀初頭の社會問題も共に籠められてゐることに於いては、まさしく近代の大文豪である。

## 七、實行的世界主義への伸展

千九百廿一年の末アンリ・バルビュスはロマン・ロオランの理智的理想主義の消極的な要求に過ぎず、實證世界に何ら事實的な、實現し得らるゝものを持ち來さないのを非難して、兩者の間に三四回の應答があつた。バルビュスの「ロオランディスム」は、要するに保持すべきでないものを批判はするが、單にそれに止まつて、打ち倒すべきものに代るべき何物をも提出しない。實行的方面には何等の考慮も拂はないで超然としてゐる。現在社會組織に對して戰爭を引き起す非難を如何に熱烈に浴びせかけても、それがたゞ非難の聲にとどまつてゐれば、戰禍に遠ざかれればまた新たな戰爭が發生する。現組織



にたゞ敵對的示威を試みるだけでは駄目であると難じたのに對して、ロオランは、「クラルテ」の人々は餘りにも生活を合理化せんと企てすぎる。ユウクリットの幾何學の問題で人類進化の謎を解かうとするが如きものである。或る強制に代ふるに他の強制をもつてする事には不賛成である。知識階級は眞理に對する精神の勇敢な戦ひか、然らばガンディの如き權威に對する「非承認」の態度を主張する。要するにロオランは理想主義的革命家であり、バルビュスは實行主義的革命家である。一方が「自由」の選手であれば、他方は「平等」の選手である。そしてバルビュスによれば、「自由」なるものは消極的な力であり、専制主義から既成法を引き崩す時にのみ存在する。然るに「平等」は制度の部分内に正確な科學的觀念を持ち來すものだとするのである。けれどロオランによれば若し自然法則なるものが具體的存在を持つてゐると信ずるならば、それこそ意識しない神祕家だといふ事になる。つまりロオランは目的は容易に達せらるゝものでなく、達したと思ふ時は既に異つた強制で押へらるゝが故に、寧ろ手段を正當なものたらしめて時機の來るをまてといふのである。歐羅巴は今は革命をなすには餘りに疲れてゐる。手術を受けるには餘りに弱つてゐるといふのである。バルビュスはさういふ消極的な責任回避的な態度は考へられない、目的は一つの組織に代へるに他の組織をもつてしようとするのである。その場合の手段が多少の極端に走らうとも、一切の目的に對する單なる一つの細條であり、然かも一時の細條にすぎぬとするのである。

兩者の態度にこの相違はあれ、バルビュスは嘗てロオランの盟友であり、たゞロオランよりは一層急

進的で、一層實行的であるといふだけで、その向ふ方向に於いては異つてはゐない。けれど、ロオランに較べて一層の進出であることは事實である。ロオランは飽くまで理智的だ、理智的統合を望む、自由をもつての統合である。これは國際主義（エンターナショナルイスマ）といふべく、バルビュスは下からの合一聯盟によつて寧ろ世界の同時的隆起を目的とする。そして手段としては平等の隆起のためには強制をも認める。これは寧ろ世界主義（コスモポリタニスム）といふべきである。

バルビュスの出發は最初ゾライスムから來てゐる、彼の「地獄」（ラフエト）は自然主義的作品の上乗なるものである。彼の母親は英國人であつたと記憶する、彼の風貌にもアングロ・サクソン式の瘦形が見えてゐる。俊敏である。いかにも革命家らしい眼光を備へてゐる。「我等」といふ短篇集にはいまだ單なる鋭い觀察者たる文藝家バルビュスを見るだけである。けれど戦争の中に書かれたる「砲火」（カウワ）はまづもつて彼の反抗的な氣勢を示し、やがて「クラルテ」にいたつて、彼の態度は、その作品の主人公シモン・ポオラ（シモン・ポオラ）と共に確立したのであつた。かくて「クラルテ」運動は開始せられたのであつた。戦争から生れた文藝の有名なものは、二様に分れる。一つは後方に於いて、國內の戦時の有様を取扱つたものと最一つは戦線に於ける生活描寫である、この後者の中に「砲火」も「クラルテ」も當然入れらるべきものである。そしてこの他には、代表作として擧ぐべきは、ジョルジュ・デュアメル（デュアメル）の「殉死者等の生命」、これはロマン・ロオラン派の優れた文藝思想家であるデュアメル（デュアメル）の作品であり、アンリ・ジャック（アンリ・ジャック）の「我等」であり、ロラン・ドルジュレ（ロラン・ドルジュレ）の「木の十字架」であり、その他擧げて算へ難いほどであるが、バルビュス



の如く鮮かな進出をした人は他に見られぬ。

モオリス・パレス、ロマン・ロオラン、アンリ・バルビュスとこの三人の左右の傾向の代表人物を擧げて、世紀初頭から現在までの思潮の變遷を考へて見れば、僅かに廿六七年にして幾世紀をも経過したる如き感じさへ起る。例へば宗教情緒といふ一題目について考へて見る。パレスは宗教感を傳統と結び付けて、更に祖國愛に結合し、國境まで擴げたけれど、それを越すことを敢てせず、ロオランはそれをもつて國境を越えて世界に散分し、バルビュスは第一にクリストといふ一人物をして、「クラルテ」の中へ出現せしめ、シモン・ボオランが傷ついて戦線へ倒れてゐる前へ悲しき面貌をもつて現はれ出でしめ、第二には「クリスト」(CHRIST)なる作品をなして、全き労働者の子、革命の兒として描き出してゐる。バルビュスの「クリスト」は世界のクリスト傳説の變遷の上から言つても、ルナンの「クリスト傳」がクリストを人間化したと言はれて以來約六十年にして、徹底的に労働者の手に奪ひ取つたクリストとして最も興味あるものである。

ヴィクトル・ユゴオは嘗て、人間が戦ふべき三つの戦闘として、對自然戦、對宗教戦、對社會戦とを擧げ、原始以來凡ゆる人間の共通環境たると同時に寸時も油斷の出來ぬ敵として自然力を考へ、次に迷信によつて宗教を作り、人爲的な神祕的な拘束を我から造りだして囚はれ人となり、或ひはそれを利用して大衆を抑制する具に供するものとして迷信を第二の敵と考へ、更に社會組織の不合理に對しては飽くまでも戦ふべきものとして社會戦を第三に置いたのであつた。そして、彼の有名な三部作、

「海の労働者」、「ノオトル・ダム」及び「レ・ミゼラブル」を書いたのであつたが、この偉大なロマンティックにあつては、何としても個人主義的英雄主義の範圍をいづる事は出來なかつた。迷信は破り得てもそれは單なる迷信にすぎない。宗教そのものを地上へ引きおろすことは敢てなし得ず、クリストその人でも地上へ立たしむる事は出來なかつた。

ルナンの「クリスト傳」がいかにクリストを人間化したと言はれたところで、それも單なる唯美的詩人の情感で、クリストの身内へ人間の情緒を吹き込んで見たに過ぎぬ。クリストは依然として遠くにある。バルビュスの「クリスト」は労働者の子たる以外の何物でもない。神祕の靈にも包まれねば、天上を高く飛翔もしない。起て、爲すべき強き意志をもつて起て、強き意志は自信である。その自信が奇蹟的な行動となつて現はるゝ。現在の世界はまさに、この無産の労働者の子の強き意志の實現によつて奇蹟の現出を望んでゐるのである。凡ゆる労働者がクリストになるべき時に來てゐるのだとするのである。クラルテだ、即ち光明は下から射す、地の光りだ。「クリスト」は即ち「クラルテ」である。地光は何處からでも發する。地球の表面ならば何處からでも發する。クリストは何處の國にでも生きてゐる。差別を認めて、その自由なる結合を求むると言ふが如きなまぬるいものではない。最初から差別などはないのだ、たと壓迫と傳統の重荷の下に一樣に悩んでゐる者が、一樣に同時に全般的に隆起することである。一樣に光りを發することであるといふのである。

次に傳統といふ問題について考へて見る。バルビュスはいふ、「二十世紀の初頭、佛蘭西の智的中心



には、三十九名の最も名譽ある文學的裝飾家達が一團となり、反革新の古典的宣傳の勢揃ひを見たのである」と。恐らくアカデミシアン等の事をいふのであらうが、傳統主義の文學が今日も勿論、古典の遠い投影の中に蒼白い姿をして立つてゐることは事實である。そしてまたシャルル・モオラス等の「ラクシオン・フランセズ」が二十萬の讀者を持つてゐるのに、革新派の「ユマニテ」紙が僅かに五萬の讀者しかないことも事實である。けれど、バレスやブウルジエの立てたる傳統の輝きが、バルビュスの「クラルテ」のなかで残るところなく打倒されたことも事實である。殿堂の破壊である。クリストは陋巷を裸足で歩いてゐる。嘗てゾラ及びメダン派の文學を邪道として罵つた人々は、それより三十年もたゞずして斯くも伸展して行く思潮の急激な速度を如何に見んとするであらうか。これは右より左へ、過去より未來への流れの最近の二十六年間の二十世紀の文學思潮の最も代表的傾向を極めて大まかに纏めて見たまでである。次にはもう少し細かに觀察を下して見ることにする。

## 八、象徴主義文學以後

——「ロマン派」「ナチュリズム」「ユナニスム」「未來派」「キュビスム」「ダダイスム」

象徴主義文學の一时的爆發、主觀的革命が徐々に平明になり、理解し易き表現をとり、形象を次第に古代の神話傳説から採るやうになつて、例へばアンリ・ドゥ・レニエの如き極めて平明多産的な詩人に伸展して來るにつれ、更に意識的にその傾向を一層意義あるものにせんとする運動が生じて來た。

それがロマン派 (Ecole Romane) と呼ぶものであり、その首領と見るべきはジャン・モレアスである。彼は希臘のアテヌの生れで、少年時から佛文學を研究し、後獨逸へ、伊太利へ留學し、やがて巴里へ來て定住する事となつた。彼は佛蘭西の詩が言語上非常に貧弱なものになつて來たのを嘆き、十六世紀のマレルブ、ロンサル其他ラ・ブレアードの連中の詩風をとり入れ、更に中世紀文學をも復興せしめ、コティク精神の復興によつて詩を平明豪健なものにしようとしたのである。思想に於いても詩調に於いても均整調和を求め、壞廢派象徴派の極端な奔放の表現の整理をせん事を求めたものである。即ち一方に古典美の均整調和を求むると共に、他に十六世紀式の豊富と平明とを要求し、象徴派の餘りに個的であり餘りに主觀的であつたものを、もつと共通的な、廣い、客觀的のものにせんとする必然的な傾向である。ジャン・モレアスの感化の下に働いた詩人等はレエモン・ドゥ・ラ・タイレエド、ジュール・テリエ、エルネスト・レノオなどである。

彼等は一方に希臘古典の明晰統一の美と、他方に中世紀傳統の神祕的なカトリック精神とを要求し、兩様の傳統の合一に立ち歸つて、そこに共通な郷土を求めいださうとした。従つて彼等がモオリス・バレスや、シャルル・モオラスの如き傳統主義者等と共に活動したからとて自然の事である。そしてこの詩的流派は更にシャルル・ベギイの中に流入し、ポオル・クロオデルに盛り上り、更に現存の最大詩人といはれてゐるポオル・ヴァレリイに包括されてゐるのもまた自然である。ヴァレリイの中には、秩序も混亂も共存する。古典美も、ロマンティックも、バルナシアンも、象徴主義も盡く包括されて存在すると言



はれてゐるが、最も近くは、このロマン派の流れがヴァレリイに入つて、最も力強き隆起を見せたものと考ふべきであらう。

然るにまた他方には、象徴派があまりにも苦しくもがき、悶え、その表出として幻影を浮ばせ彼方の世界を求めてゐる有様を、ヒステリックな壊廢と見なし、もつと自然そのものから直接の感興を受けて、一般的な、健康な、明るい、日光の充ちた生活を要求する傾向が生じて來るのも必然の勢ひである。前記のロマン派が強健を過去の歴史のなかに求めたに反して、この他方の要求はもつと手近な天然自然にその健康さを見出さんとしたのである。これも象徴主義に對する反動の如く考へらるゝが、實は象徴主義の餘りに個的な主觀的な革命を、一層廣い共通な平明なものにしようとした、寧ろ象徴派の延長と見らるべきである。この傾向の出發はフランス・ジャムに始まる。ジャムは二十世紀のラ・フォンテヌと呼ばれる、自然詩人である。

この傾向の詩人等は自分等の主義を *Naturalisme* (純正自然派) と呼ぶ。彼等は最早や夢想のなかでその主題を取扱ふことをしない。實生活そのものを取扱ふ。實生活が凡ゆる夢よりも美しく、深く思はるゝ。自然で單純で人間的である。この運動の前では、象徴詩の正系を傳へてゐるアンリ・ドゥ・レニエも、次の如く言はずにはゐられなくなつた。「象徴主義に對して人々がなす一般の非難、それは一語につづめて見ることが出来る。即ち實生活を閉却したといふ事である。我々は夢を見てゐた。彼の人人(ナチュリスト等)は實際に生きんと欲する、彼等が生きて來たことを素直に、單純に、打ちつけて、

抒情的に言はうとする」と。即ちこの新傾向の人々が見れば、象徴主義は餘りにも爆發的で、個的で、種族、土地、時代、社會環境、自然環境へつなく羈絆をたち切りすぎて、智的無政府的になるか、奥祕的な技巧になり、果ては寓喩的なものにも墮してしまふ。彼等のもつと實際的な生活現象を具體的にとり扱はうとするのである。象徴主義に對する反動の如くまた延長の如くも思はるゝのである。そして彼等は自分等と傾向を同じうする先輩として、エミール・ゾラを、オギュスト・ロダンを、エミール・ヴェレアランを擧げてゐる。彼等とは最初いづれも象徴主義の洗禮を受けた人々であつて、サエン・ジョルジュ・ドゥ・ブウエリエ、ウジエヌ・モンフォル、アルベール・フルウイイその他であり、「メルキュル」誌もこれに力を入れ、千八百九十七年には新たな「ナチュリスト評論」も發行せられ、巴里のみならず、地方にも、南國にも、白耳義にも同様の運動が生じ、巴里に於ける「ランクロ」誌はルイ・リュメ及びシャルル・ルイ・フィリップ等によつて起されて、この運動の中から發生したのである。

千九百年に彼等は「近代美學團」、「青年集團」などの團體を作つて集まり、その集團は二年間繼續した。その中には、民衆の見地からの美術史を書いてゐる現代美術史家の權威、エリ・フォオルも、畫家のヴァン・ドンゲンも、詩劇作家で自國の古典劇よりも寧ろ北歐のストリンドベリイに求むる所多いルネ・フォオショワも、また詩人で物語作家で後にキュビズムを主張した近代の伊達者ギユイヨム・アポリネールもゐたのである。更に彼等の指導者の如き地位に立つブウエリエは「謝肉祭」その他の劇作で皮肉な社會批評を示し、ノアイユ夫人は彼等と共に自然美と母國愛との詩人たる本質を示し、フェルナ



ン・グレックは詩に評論に人生派たる主張を見せてゐた。要するにこの流派の行き方は、ロマン派が古代中世に溯つて生の源泉を求め來たつたのに對して、直接の環境たる自然に、更に諸外國の、例へば北歐の劇に、或ひはロシアの小説に或ひは獨逸の音楽に凡ゆる力を求め、集め、その力によつて強大な活氣を得て更に四方へ瀾れ出でようとするのである。シャルル・ルイ・フィリップを、エリ・フォオルを、或ひはオクタヴ・ミルボオを考へて見れば、大體に於いてその傾向はうかゞひ知らるゝのである。

次に第三の運動としては、過去の運動にもよらず、自然または外國の力にもよらず、もつと直接な環境、社會集人、群集の中に文藝の源泉を置かんとする動きが初まつて來た。それが L'Abbaye の群と呼ばれる人々である。これは最初は、アンリ・マルテンス・バルズアン及びアレクサンドル・メルスロオ等が首唱で千九百七年に集められたるグループであるが、間もなくジュウル・ロメン (Jules Romain) がその指導の形に立つやうになり、<sup>トナニスム</sup> *Thannisme* (歸一主義) の運動に轉開せられ、この群の中に加つてゐる人々が現代佛蘭西文藝の最も活動してゐる人々である。その人々は即ち、ジョルジュ・デュアメル (Georges Duhamel)、シャルル・ヴィルドラック (Charles Vildrac)、ルネ・アルコス (René Arces)、アルベール・ドワイヤン (Allert Doyen)、シネヴィエル・ジウヴ (Cheneviere Jouve) の七人であり、デュアメル、アルコスの如きはロマン・ロオランと最も近く、その傾向を追うてゐる人々である。ジュール・ロメンとても勿論ロオランの影響は受けてゐる。

ジュール・ロメンは社會學者ダルドやデュルケエムの説く群集心理、社會心理を文藝の中で表現せん事

を求む。彼の詩、彼の劇作、彼の小説は盡くこの集合人の意識心理の研究表現である。ヴェレアランの群集心理の一層精密な研究である。集團は、それを組織してゐる個々人の意識とは異つた一團の意識を持つてゐる。社會現象は事實はこの集團心理によつて作りいださるゝ。吾々の生活を支配する現象も、實はこの集團心理によつて作りいださるゝ社會現象である。つまり集團心理が個人生活を支配して行くのである。詩人は須くこの集團心理の通解者たるべきである。身をたゞ衆人の中に置くだけではない。その集團の中になつて、その集團の心理をもつて通解し表現することが詩人の使命である。これは決して比喩的なことではない。科學的な確かさを持つて現はし得ることである。「若し君が都市の一街に生れ出る一群の人々を見たならば、その方へ歩いて行け、そして君の全身を與へることだ」(ユナニスム) としてその人々の心理と一つになつてその集團の意志を表現することである。ジュール・ロメンは詩に劇に小説にこの新文藝の確かなる表現を示してゐる。彼の「何人かの死」、「歸一の生活」、「仲間」、「歐羅巴」、「リュシエンヌ」などの作品は最も興味ある意義ある新文藝である。

このアペエイの連中は今日まで團體を作つてゐるのではない。それぐゝの方向に向つてはゐるけれど、その青年期に於ける覺醒は何人の中にも明かにとめて見ることは出来る。ジュール・ロメンはシュヌヴィエルと共に新たなる詩調を工夫し、彼等全體に通じての平明な確な、從來の抒情詩に比しては、散文的に思はるゝけれど、集團心理の表現に適する格調を作りいだしてゐる。デュアメルの詩もその意味では散文的に感ぜらるゝけれど、彼等の主張には一致してゐる。デュアメルの「殉死者の生活」、「文



明、「深夜の告白」などの物語、その他の劇作、ウィルトラックの詩を除いては總ての劇作が日本へ翻譯せられてゐるが、あの大らかな、こだはりのない人生派的の劇作はいかにも素直に正直に力強く歩いてゐる人だといふ感じを與へる。シュヌヴェイエルシュヌヴェイエルの詩は平明素直で、そして所謂散文的でなく、また一人高しとしてゐる風は全然なく、大衆の一人として自在にうたつてゐる詩である。

このグループについて千九百九年に「未來派」の宣言がマリネッティによつて、發せられた。歸主義は集團心理の表現を生命とはすれど、如何なる集團であるかは明かにしてない。未來派は言ふ、「我々は勞働と快樂と反抗とによつて掻き立てられたる大集團をうたふ。」「今までの文學は、思索的な不動性、恍惚、夢幻境を表現してゐた。我々は進撃的な運動と、狂熱的な不屈を、體操的な歩度を、危険な飛躍を、平手の頬打ちを、鐵拳を高調せんとする。」と。そこで彼等は新らしい美、迅速進轉の美、動的な美をもつて世界の輝きたらしめようとするのである。自動車、汽車、飛行機、凡ゆる速度を示す機械美の高唱、彼等は自分等が幾世紀の先頭に立つことの自覺のもとに、後を顧みるなと叫び、時間も空間も既に死し、自分等は永久つゞく速度進度を作つて、その進行の絶對のなかに住んでゐると言ふのである。

その程度に於いては、彼等の言ひ、彼等の現はす詩歌も繪畫も彫刻も、象徴主義の主觀的個的革命であつたものを、集合的な反抗的な革命、一種の社會的象徴主義社會的象徴主義に持ち來したものであるとも見られ得る。そして從來の傳統的靜的な美を、動的な美、爆發促進的な美に置き換へたものとも考へられぬ

ことはない。

然るにマリネッティその他の未來主義者等は、それを伊太利人獨特の熱狂をもつて、飽くまで押し進め、「我々は世界の唯一の健康法として戰爭を、軍國主義を、愛國主義を崇めよう」と叫び、美術館を、圖書館を破壊し、道德主義、女性尊重主義、機械をねらふ實用的な凡ゆる怯懦を打ち倒さうと叫び出した。そして最近にいたつては、遂に彼等伊太利の未來派の連中は、盡くファシストとなつて、ファシズムは即ち未來派の政治的表現であり、ムッソリニは未來派の精神を代表する理想的權化であると言ひ切ることに到達したのである。

この未來主義は佛蘭西人にとつては、純粹な表現ではない。この未來主義に最も多く共鳴したのは、ギユイヨム・アポリネールであるが、彼及び彼の周圍に集つた新人等は、未來主義者とはいはない、キュビスムである、キュビスムと呼ぶのである。千九百十二年に出版せられた「新詩人詩集」(Anthologie des Poètes Nouveaux)にはマリネッティも、アポリネールも、アンドレ・サルモンも含めてあるが、その序文でランソン教授はいつてゐる。「サンディカリストの革命が唸りをあげてゐる都市の中で、工場の煙突の林立してゐる地上で、飛行機の飛翔し初めた空の下で、我々が送る現代の特殊美が、この新らしい美が早晚その優秀な詩人を持つであらう」といつてゐるが、キュビスムの求むるところは、この程度である。凝つと見つめただけの美ではなく、動的な全的な美を表はす詩人を求むるのである。未來主義の如き極端なものに持ち來たされてはゐない。未來主義はまさしく現代伊太利人の持つ表現である。



佛蘭西に於けるキュビズムは最初繪畫の方から初められた。セザンヌからピカソにいたるまでの新らしき表現形式である。キュビストは主張する、「我々以前には如何なる畫家とて、その描く事物を手で撫でる注意をとらなかつた。」即ち全體としてその事物を掌へて、撫でまはして見るほどの注意をしなかつたといふのである。たゞ見るだけである。視覚にうつたへるだけである。全的に一時に凡ゆる感能で感得しなかつたといふのである。これを文學的にサルモンの語をかりて現はせば、「一時に一事象の凡ゆる方面を感知せしむる事である。」それで繪畫ならば、一見して平かに見えてゐる表面も、その内部は全く靜的であるはずはない、従つて實はその表面も不斷に戰慄を起してゐるのである。たゞ視覚だけには靜的に見えても實は、事象は斷えず動き慄へてゐる。それを描くのが眞實を描くことである。従つて單なる寫生は全く意味をなさぬ。内部のうづまき、生命の動きをとらへなければ、その動きはふるへる線となつて或る律動によつて常に限定されずして、無限に伸展して行つてゐるものである。

言ひ換へれば、或る事象をたゞ有りのまゝに見て、それが靜的なものと観ずるのは、不足な觀得である。若し言ふべくば一度びその靜的なものを破壊して、直ちに再建し得る力をもつてその事象を究めねばならぬ。それが一事象を一時に各方面から感得する事である。これは從來用ひられて來た意味でのレアリスム（現實主義）だけでは十分の意義を現はし得ない、寧ろその意味では、「超現實主義」と呼ぶべきであるといふのである。そこで、アポリネールはいふ、「人間が歩行といふ事の模倣をやらうとした時に、車輪をつくりだした。これは少しも人間の脚に似てはゐない。人間はかくの如く知らず識らずに超現實を行つてゐるのである」と。

キュビストの著名なる文藝家はアポリネールを始め、マクス・ジャコブ、アンドレ・サルモン等である。アポリネールは詩に小説に劇に活躍してゐる、その中「レレジアルク・エ・コンパニイ」(L'Hérésarque et Cie)ではゴンクウル賞を受けてゐる。詩集「カリグラム」は詩の如き畫の如き總てを一時に打ちつけた到底翻譯などは出来ぬ、綜合詩を集めたものである。彼の最後の論文「新精神と詩人等」(一九二八年十二月)は彼の態度を最もよく語つてゐる。ジャコブとサルモンは現代に活躍してゐる新文藝家であり、彼等の大體の意向は、アンドレ・ブルトンの「超現實主義の宣言」(一九二四年)に於いて知ることが出来る。

最後に Dadaïsme を擧げて見る。

これは戦争の最中千九百十六年スキスのチュリッヒのヴルテールの居酒屋へ集つた青年文藝家等が呼びだしたもので、Julien Dada を二年間つゞけた。その首長は、トリスタン・ツァラである。「我より以前に人々の在りしやを知らうともせず」といふのがその標語である。やがて巴里へ移されて「ル・カンニバル」(食人)と題して發行をつゞけた。その時、「文學」と題した小評論雜誌を出して、文藝諸家に「何故貴下はものを書かれるか」といふ質問を出して人々を惱ましてゐた。ルイ・アラゴンの、アンドレ・ブルトンの、フィリップ・スウォポオなどの連中が、このトリスタン・ツァラが巴里へ來ると共に合同して、ダダイスムは大きくなつたわけである。即ちダダイスムなるものも要するに、「超現實主



義」といはるゝものゝ一部であると見らるゝのである。

それ以來、繪畫彫刻に、文藝に、彼等は活躍を初めたのである、そして、アルベール・ジヤンヌ、ピ  
アビヤ、ザラ、なぞの詩、斷片劇「純去勢者」とか、「言葉なき詩」とか、「葬式の競技者」とかいつ  
た題目からしてうかゞはるゝ一種の虚無的な文藝を作り出した。ダダは何かと云へば、「ダダは何も、  
何者も求めない」、「ダダは何も意味しない」のである。ダダイストは、彼等自身のいふところでは、凡  
ゆる傳統的進化法則にながらる羈絆を斷つことを求める、古典主義から浪漫派へ、やがて新浪漫派へ、  
現實派へ、象徴派へ、未來派へ、キュビズムへの凡ゆるつながりを斷ち切ることを求めるが、積極的  
は何も求めない。虚無だ。強ひて言へば、混亂そのもの、過ぎ去りゆくそのものを、瞬間に示すだけ  
だ。積極的な實在などは何もあはしない。ザラはいふ、「無組織そのもの、それがしかし最も同感的  
な組織である」と。混亂そのもの、しかしそれが最も同感できる秩序であるといふことである。

恐らくこれは五ヶ年間の大戰そのものが文藝的表現をなしたものであると言つてよからう。大戰の  
中から生れたものといはんより、戦争そのものがなした文藝表現である。冷たい笑ひである。赤い笑  
ひといふよりは寧ろ白い笑ひだ。總てを破壊する戦争、何一つ残さない戦争そのものの表現、無組織  
であり、無秩序が秩序である。千九百十六年は丁度戦争の眞最中である。戦争の中心である。スミス  
はこの戦争を國境のそれこそ四方八方に感じて、たゞ歐羅巴の中央で一ヶ處、廣漠たる戦禍の沙漠の  
中に残された、弱小の綠地である。四周からの壓迫が若人等を驅つてこの叫び聲、Dada、虚無だとか

ばせたものであらう。

けれど、このダダイズムの運動には多少とも當時の人々が同感を起さないものはなかつたに違ひな  
い。たゞ反抗の冷たい笑ひを感じるよりは、一層嚴肅な空氣を身に覺えたに違ひない。そこで評論家  
等は、彼等の叫びを唯の反抗冷笑とは考へないで、極めて冷たい理智そのものの閃きと見るのである。  
混亂そのものに文藝表現を與へる、無秩序そのものを文藝に捉へるにはたゞ唯一の何にも動かされざ  
る氷の如き理性だけ、死の如き冷酷な理性がなければならぬと観するのである。

と同時に一方には、フュチュリスム、キュビズム、ダダイズムこれ等の混沌的な、爆發的な、壞廢的な總  
括して超現實主義といはるゝ如き文藝は、要するにブルジョワジイズムの崩壞して行く社會的文藝的表  
現であつて、革命前夜の文藝であると觀察する批評家もあるのである。虚無といつても現在組織に對  
する虚無である。無組織といつても現在組織に對する破壞である。その壞廢虚無を示したものがこれ  
等の文藝の役目であるとするのである。「クラルテ」の評論家等はかく觀じてゐる。

それは兎に角として、このダダイズムに連關したる四人の作家を擧げることが出来る。その一人は  
ルイ・アラゴンである。彼は象徴詩人の中で最も象徴詩人たるアルテュル・ランボオを撰んで、千九百  
二十年代の青年の心状態の象徴となさんとしてゐる。「Ancoet ou le Panorama」が彼の代表作である。  
成程ランボオの「予は予が心の混亂を見出すに終る」は、ダダイストにとつて好適の語に違ひない。  
ランボオの個的意識のデカダンは千九百二十年代にいたつて一般ブルジョワ青年の意識を支配してゐ



るのである。

次はジョゼフ・デルタイであり、その作は、「*Sur le fleuve amour*」であり、第三はダダイストの詩人、フリップ・スウポオである。

彼の、

「理智には未來がある。

ダダは如何なる未來もない。

理智は錯亂だ。

ダダはダダだ。」

最も好くダダイストの傾向を示してゐる。第四に日本に周知のポオル・モオランを擧げる。彼は千八百八十八年の生れ、まだ血氣の壯年である。「若くて、強くて、美しく、完全な道德的健康性を持つてゐて、現代の智的道德的混亂を描きいだす、ダダイストのなかでその名が最も確かに永續すべき人と思はるゝ」といふ判價のあるモオランは、「夜ひらく」「夜とぞす」「戀の歐羅巴」その他、好適な翻譯者によつて日本には十分知られてゐる。彼のなかに見らるゝダダイスムは最も完全な模範的表現を見せてゐる。虚無な冷靜な字幕の上を目まぐるしく、華かに、過ぎ去つて行く人生の姿、その経過のみはあれど、實存はつひに捕へられず、急速に過ぎ去つた旅の如く、たゞ茫漠たる虚無があとを埋むるだけである。

## 九、現代小説概観

ポオル・ブウルジ、モオリス・パレス、及びアナトオル・フランス、ロマン・ロオラン等の對立から、アンリ・バルビュスにいたる大體の文藝思潮は前に説いた通りである。その間に於ける諸流派の概観を次に略説することにす。

第一に異國情緒エキゾチシズムの小説、植民地問題、人種問題の小説である。この派の權威はビエル・ロテ(1850—1903)である。彼の海を戀ふるは一種の郷愁の如く、自由の際涯なき象徴の如き海洋、その果てなき彼方の光の國、赤道無風帯に見る涅槃境の如き絶對の靜寂、彼は不知不識にそれに引きつけられて海に浮ぶ。しかも彼は軍艦に乗せられてゐる。彼は時として無限の際涯から有限の國境內へ呼びかへされずにはゐられぬ。彼は上陸して伯林へ行く。其處には七十年戦争の自國敗辱の記念品が並べられてゐる。「佛徒の如き無頓着な朗かさの方へ遠ざかり行く旅行者の我が解脱にも拘はらず、なほ其處に國境を見る。戦争の召喚へいかに迅速に呼び返さるゝことであらう。」凡ゆる同胞愛の説理も其處では果敢なく碎かれる。祖國なる舊い言葉に、或る定つた色彩の旗に、まだ不思議な力がある。灼熱靜寂の印度洋上にゐても伯林を考へずにはゐられぬ。この無限と抑留、自由と拘束、その間からロテの持つ一種の空寂なニヒアンスが浮び上る。一種の哀調が生じて來る。明るい中に陰影が漂ふ。更に彼は終生の海上の旅行者である。彼にとつては、人生はまさしく旅である。事象は彼の眼前を掠過し明滅す



る。残るものは鮮かな印象と思ひ出とだけである。人類は何處へか廣漠たる旅程を續けて行く、その過程の中で我々は跪き嘆き泣き笑つてゐる。それを如實に味ふものは旅である。ロティの印象主義的文藝はその時々閃きである。そしてその印象主義の最も鮮かな閃轉を受けてゐるのは若い作家のポオル・モオランである。ロティの代表作は「氷島の漁夫」、「ラマンチオ」、「ロティの結婚」、「アンヌオルへの巡禮」等であり、三十七部の作品を書いてゐる。

ロティの弟子であり崇拜者であり同じく海軍の士官であるクロオド・ファレエル(Crosnier)は主として東西人の文化の比較、世界各國民族の心理解剖及び比較に目を向けてゐる。各國人を一時に作中に浮ばせて自らなる對照を見せてゐる。彼の代表作は「アヘンの烟」、「暗殺者」、「戦争」等である。「戦争」では日本の近代文明を取り扱つてゐる。

次はルイ・ベルトラン(1866—)である。現實主義者の目をもつて異國を研究しようとする人である。主として舞臺は北阿弗利加であり、亞細亞人の血と歐洲人の血との混合より生れたる文化の研究解剖である。彼はその中から「聖オギュスタエン」を發見した。オギュスタエンの傳記と更にそれを物語とした「サンギニス・マルティロンム」(1920)はまさしく、學者と文藝家との結合した才能を示すものであり、嘗てフロベールが「サランボオ」を書いたと同じ用意と、同じ想像力と、そして同じ地方とを用ひたものである、その點で彼はフロベールの弟子といふべく、彼自身フロベールのその方面に關する後繼者をもつて任じ、そして「フロベール評傳」を書いてゐる。これは「フロベール」の數多き傳記

中の權威である。「ペベトとバルタザル」、「東方の迷景」、及び「聖オギュスタエン」を代表作とする。

タロオ兄弟、兄ジェロム(Jerôme)弟ジャン(Jean)、この兄弟は現代作家中の展望の廣い、表現の確かな最も尊重せらるべき人々である。彼等の若き頃の作「デングレエ」はゴンクウル賞を得た出世作であり、學校に於いては先生であり、その思想を受けたロマン・ロオランへ獻じてある作品である。題材は南阿戰爭に取つてある。この戰爭は近代帝國主義軍國主義の最も露骨な表出をしたものである。ロオランもこれを取材に「時は來らん」といふ劇を書いてゐる。デングレエは、キップリングその人の面影を浮ばせる帝國主義者である。デングレエ夫人は佛蘭西人である。この夫婦間の會話は最も興味深いものである。帝國主義者の解剖は徹底してゐる。「アラビヤ祭」は阿弗利加沙漠中の近代移民問題をとり扱つたものであり、沙漠の光景はロティの海洋の光景と共に絶唱である。更にバルカン戰爭を取材にした物語、猶太人問題、さらにロシアの曠野に於ける猶太族の村落を描き出した「神の王國」、「十字架の蔭に」は、彼等の傑作である。大體彼等二人の傾向はバレスとロオランとの間、國民主義と國際主義との間をさまよふ二十世紀初頭の佛蘭西人の大半の心理を代表してゐるのである。

ピエル・ミル(1861—1925)はアナトール・フランスを思はせる皮肉と理智の閃く、或ひはヴォルテエルの批評家である。疲れざる旅行家として彼の作品には阿弗利加が多く出て來る。またロティの如くアンナンも舞臺となる。彼の「バルナヴォ」は植民地の兵士であつて、最初は人種感情に支配せられてゐるが、後その卑しんでゐる異人種と相抱いて同胞愛を誓ふ物語である。ウェルスの友人であり、博い思



想の持主である。彼の代表作は「バルナヴオ」と、南方人の典型性格を描きいだした「君王」<sup>ルイ・モナク</sup>である。右の如き植民地問題、人種問題が文藝取材に供せらるゝ事は、近代の帝國主義軍國主義から當然生じて來る現象である。

又さうでなく單に冒險とか想像とかいふ意味に於いて異國を取り扱ふ人々を求むれば、ロスニイ兄弟の如き人々、或ひは「ケニヒスマルク」、「アトランテイド」の作家、ピエル・ブノワの如き、想像の豊かなる點に於いて「神々の黄昏」の作者、エレミール・ブウルジュの如きは比類なき人である。エルネスト・ルナンの孫、エルネスト・ブシカリの如きも、その傑作「武器の召喚」<sup>ラベエケテサム</sup>に於いて、阿弗利加のサハラを舞臺とし、その想像力に於いてはジュール・ヴェルヌの如く、その思想は寧ろバレスと、モオラスを師としてゐる。それ故また彼を初めとし、アンドレ・ラフォンヤ、フランソワ・モオリアックの人々をカトリックの小説家の群と分類する批評家もあるのである。

次に社會小説家の群を擧げて見る。これは、(1)社會現象を單に文藝の主材にしてゐる類ひの作家連と、(2)無産階級の一人として、又その階級者の代表者として文藝表現を用ひてゐる人々とに分けて見る事が出来るのである。

(1)の部類にはボオル・アダン、オクタアブ・ミルボオ、ロスニイ兄弟、マルグリット兄弟、ギヌスタウ・ヂエフロワ、リュシアン・デカヴ、更に年若き批評家で作家たるロジエ・マルテン・デュガアルでも、また右黨の作家政治家レオン・ドオデでも、すべて皮肉と諷刺とで、社會現象を取り扱ふ類の作家は、數

に於いて最も多いといはねばならぬ。これ等の人々の中では、ボオル・アダン(1863—1920)を代表的な作家といふことが出来る。彼は、バルザックとゾラとの後を受けて、自然主義象徴主義の洗禮を共にさづかり、社會小説、問題小説、歴史小説、異國情緒小説と凡ゆる種類をつくして、最も力強く表現して行つた人である。凡そ三十年間に六十巻を書き上げ、兩世紀の交替期に際して、當代の問題を包括し、主として交錯心理、即ち群集心理の交錯を、及びその具體的表現を取り扱つたものである。従つて取材事實の上からは歴史小説とも見られ、群團心理研究の方面からは心理小説とも考へられ、同時に社會現象と見ればそれを社會小説とも言はるのである。大衆文藝とは實はこの種のものと呼ぶべきであらう。彼は近代の最大な社會學者、美學者であり、「藝術に於ける天才」の著者カブリエル・セアイユの弟子である。彼の六十巻の小説の中心をなすは四部作——「力」、「オステルリスの兒」、「詭計」、「七月の太陽に」である。「力」の主人公ベルナル・エリクウルは十九世紀初頭の共和革命の兵士であり、單位力を代表する。彼は革命の使命、自由を各地に打ち立てるために熱意をもつて戦ふ。併し彼はナポレオンが嫌ひである。ナポレオンは自由の使徒として立ちながら、大衆を裏切つて中途にして專制の權化となる。けれどエリクウルはまだ單力であつて唯ナポレオンを嫌ふに過ぎない。その子オメル・エリクウルに到つて初めてその單力の集合を代表する。その集合力は即ち精力の社會觀念である。この精力の社會觀念が即ち觀念力<sup>イデオロギイ</sup>であつて、單一力よりは遙かに強い。この觀念力の前には當然專制君主ナポレオンは倒れずにはゐられぬ。ナポレオンの強かつたのはその精力の社會觀念が彼と



共にあつた間であり、彼が専制君主になると共にその集團の觀念力は彼を倒す方へ向けられた。それを代表するのが彼の部下のオメル・エリクワルである。アダンの他の作に「企業同盟」がある。これは亞米利加人の近代精神を描き出して、自然力との對抗に於ける個人的天才と大衆との關係を主題にしたものである。要するに彼の作品を通じての特色は力と數との紛糾、眞の力の存在場所の測定にある。力は數の中に籠る、併しその力を正當に十分に發揮するには何等かの制御統率を要する。それなしでは、その力は分散し亂行し即ち弱められはしないか。併しその力を指導するものはやはり力でなければならぬ。それは觀念力である。思想の情緒である。と同時に、それ等を具體化した人々が大衆を指導するといふのである。彼はこれ等の力の働きをとめて、その發現を具體化することを努める。従つてその作品の経路も實際大衆の生きた働きに接する如く、すこぶる紛糾してゐる。批評家モオクレエルはアダンの評傳の中で、全體としてアダンの作品は迷宮の如しと云つてゐるがまさしくさうである。「畑つた天才」、「霧のかゝつた天才」とも呼ぶ。併しこのアダンの作品の経路は、まさに兩世紀の交替期に際した大衆の心理そのものの動きでなければならぬ。彼の如きがまさに正當の意味の大衆文藝家であらう。

ジュール・ロメンを若し此處へ加へれば、彼はアダンなぞよりは遙かに冷徹な頭腦の持主であり、集團心理の表現に於いては全く文藝的な完成を示してゐる。ロラン・ドルジュレの「聖マゲロワル」はまた最も成功した同様の作品である。

(2)の部類では第一にピエル・アンブ(1870)を挙げねばならぬ。労働そのものの力、意義を確かめ、労働の平等を主張し、總てを労働の上に置いて物を言ふ。彼は當來の文藝も當然労働の中から生れる事を主張する。彼自身労働者であり、身をもつて描き出す人である。嘗て労働者であつた人ではない。現に労働者である人である。彼は「人間苦」の大作を、幾部にも分けて從來と共に更に二十年を費して三十卷に仕上げようとしてゐる。「軌道」は彼の代表作の一つであり、最後の三部作「不滅の労働」、「傷けられたる仕事」、「機械の勝利」は、平和力を示す労働に關する大作であり、「金の探求者」は平和人の労働力を知らぬみじめさを示すものであり、「蔓延する不幸」は、ロマン・ロオランの如く獨佛聯盟に世界平和の基礎を置かんとするものであり、「雅歌」は薔薇の栽培者、香水製造人、使用者等の皮肉な對照を示すものである。彼の作品は數字的確さと、労働力そのものの現はれの如き力強さを示す。その文體にゴンクウルとボオル・アダンの影響が見らるゝと言はるゝが、寧ろそれは労働の響きといつた方が好いであらう。

シャルル・ルイ・フィリップ(1874—1909)は無産階級の文藝家といはんよりは、無産階級の中に咲き出でたしをらしき自然の花である。吾々は彼の「小さき町」に「シャルル・ブランシヤル」に、その生ひ立ちを知り、「ビュビュ・ド・モンパルナス」に都會に於ける彼の周圍の無産者の姿を認め、「ペルドリ阿爺」に田舎と都會をつなぐ組織立つたはじめての物語を見る。併し無産者の中にのみ見らるゝ、傳統に汚されざる、歪められざる、生きた純眞な生命、今後に伸展すべき隠れたる大切な木の芽の開



けかけた姿を見る。その清純新生な命の芽には何人も動かされないものはなからう。ポオル・クロオデルを、アンドレ・ジイドを動かしてやまぬのもその純真さである。

彼の友人でありまた彼の如く勞苦し、彼の如く若くして死んだルシアン・ジャンは、只一冊の「衆人の中に」をのこしたのみであれど、これは細心に鏤彫した無産者の寶典である。

エリ・フェオルとジャン・リシャル・ブロックとは批評と作品とに於いてこの種の傑出せる學者であり、創造家である。ブロックの「レヴイ」と「謝肉祭は死せり」はその代表作である。その他「クラルテ」の群に屬する若き人々の中には、この方面の作家がやがて輩出し來らん趨勢を示してゐる。

これについては地方農民生活を描く作家は無數にゐる。この種の作家も二種類にわかれ、農民自身が文藝的表現をもつて、自身表の生活自身の職業自身の思想感情を表白する人々を農民文藝家といふべくば、その他の地方色や、農民生活の研究や、農村の光景やを描き出す人々を地方的小説家とも呼ぶべきであらう。この後者に屬する人々が特に多い。終生を田園に送つて巴里へは一度二度出たことが有るくらゐであるといふ南方の大詩人ミストラルを初めとして、擧ぐるに暇ないほどである。そして、この兩種の文藝家の詩の選集が地方々々によつて幾巻も出てゐる。いはゞ斯くの如き地方文藝が實は現代佛蘭西文藝の素地をつくつてゐて、その素地の中に盛り上り、咲き出てゐる花が中央市場で持てはやさるゝ華やかな産物である。

地方文藝家の最大な詩人は前記のフレデリック・ミストラル (1830—1918) であり、彼は南方文藝の

中心を形作り、南國に於いては無上の信望を収めてゐる。現存詩人ではフランス・ジヤム (1863—) である。彼の聲望もミストラルにゆづらない。物語作家ではザボワに材を採るアンリ・ボルボオも、「死に行く大地」、「伸びる麥」の作家ルネ・バザンも、無數の作品を出し、ゐるボアレエツも、ルイ・ベルゴオも、「ネエヌ」をその代表作としてゐるエルネスト・ペロションも、皆さうである。殊に大戰後はこれ等地方文藝は非常な勢ひで作りいだされつゝあるやうである。

農民文藝家と呼ばれる人々も従つて次第に數を増しつゝある形勢である。フィリップの友人で、自傳的な「或る男の生涯」を書いたエミール・ギユイヨマンの如き、「タヴァシユ」の作家、ルイ・レオン・マルテンの如き、シャルル・ドゥ・ポルドウの如き、ジョゼフ・ドゥ・ペキドウの如きいづれも傑出した人々である。

最後に、心理解剖の作家とも言ふべき傑出したる人々を擧げる事にする。これ等の數もまた無數である。エストニネ、クレルモン、モオリアック、エドモン・ジャルウ、アンリオ、ジュニオ、ピネ・ヴァルメル、デニベルノワ、殊にその獨特点文調を持つてゐるジャン・ジロオドウの如き、その他擧げて數へ難いほどである。その中で現代に傑出する二人は、アンドレ・ジイドとマルセル・ブルウストである。

アンドレ・ジイド (1869—)、何よりもまづ感知性である。それを制御し整理する適當な理智性を持つてゐる。情緒も感能も一度びこの理智性を通さずしては首肯できぬ。理智美を離れては表現をなし得ない。技巧の優れた人ではあれ、それは理智的技巧の美である。けれど強い冷酷な理性ではない。



感知性が眞先きに働く、柔かく、たぢろいで、しかも亂れず、直ちに陣容を立て直す態度はこの理性の働きであり、それが彼の作に懐しみと澄みとほつた清涼感を與ふる所以である。我から積極的な理想を持つほどに熱しはしない。けれどいつも冷靜でゐられるのではない、常に敏感である。といつて感激して我を忘れることはない。彼は常に影響を感じる。外國の文學が、ドストエフスキイが、オスカア・ワイルドが彼を動かす。といつて彼は全然我を忘れてそれに従つてしまふ事は出来ない。何物にでも動かされはしても、何事にも我を忘れることは出来ない。感知性と理智性との交替、感動と整理、これがジイドの心の動きである。かゝる作家は、印象と解剖とを生命とする。従來の藝術家といはるゝ人の典型である。けれど若し彼が感動が深かすぎたか、或ひはその感動を整理しきれなかつた時かには、いつもの彼とは思はれぬやゝ亂れた表現をする。彼の「田園交響樂」は感動に過ぎ、「地上の滋味」は整理が足りない。「狭き門」は完美でありながら、「ヴァティカンの洞穴」は亂れてゐる。彼の傑作は、「種子死せずんば」、「狭き門」、「背徳者」、「蕩兒の歸り」などを、擧ぐ可きであらう。彼の作品が如何なる國の人々にでも愛讀せらるゝ點は、以上の純藝術家的智感と整理、感激と解剖の快い過程である。彼の父系はプロテスタントで南國であり、母系はカトリックでノルマンディである。この南北の相違、宗教の相違は、佛蘭西に於いては全く融合し難きものである。彼はこの兩系の中に生きる。幸ひにそれが彼に於いて背反はしない。争闘はしない。併し兩者が全く融合はしない。均整を保てば消極的な白紙状態となる。時にはそれが彼の意識に於いて分裂することもある。それを押へねばならぬ、押へ

得ても常にそれに對して敏感でゐずにはゐられぬ。彼の敏感な感知性も、整理力もそれから來てゐると説く評論家もある。いつも交叉點に立つて注意を怠らない觀察者、それには感知性と整理力とが何より大切である。思考と實行の交叉または分岐點に立つと従來考へられてゐた藝術家肌の人として、アンドレ・ジイドはまさに藝術家そのものの如き典型である。

マルセル・ブルウスト(1873—1923)の「失はれたる時を求む」は量に於いてロマン・ロオランの「ジャン・クリストフ」以來の組織立つた大きな企てであり、ベルグソンの時間の觀念を具體化した如き性質のものであり、これに關する論評は既に多く出てゐるが、全部を通讀して、改めて意見を書いて見たが故に、此處では紹介も論評も特に差し控へることにする。

この他に女流小説家の群がある。細やかな愛情を取扱ふマルセル・ティネエル。「女性」、「汝」などの作者、バルビュスの弟子、マドレエヌ・マルクス。ラシルド、コレット・ウイリイの如き人々がある。

## 一〇、現代劇文學概観

自然主義文學は劇に於いてはアンリ・ベックを代表作家とする。「自然主義の聖書」と呼ばるゝ「鴉の群れ」、「巴里の女」その他、ブルジョワ生活の深酷な解剖である。目をそむけずにはゐられない現實の暴露である。この客觀的現實性の劇に對して、主觀的な詩的な意識生活を表白してゐるのが象徴劇或ひは神祕劇である。マアテルリンク(1862—)、ポオル・クロオデル(1868—)などを代表者とする。



マアテルリンクの「マリイ・マドレエヌ」から「モンナ・ヴァンナ」にいたるまでの劇作は、暗澹たるデカダンの生活、死と廢頹の恐怖から、次第に愛の交霊生活に到達する経路であり、その中に明かに神祕家と革命家との握手が見られる。象徴主義が主觀の革命たることはマアテルリンク劇がその一例證と見らるゝ。クロオデルの劇作はマアテルリンクよりは客觀性に富む。「人質」、「マリイへのお告げ」などが代表作である。愛の奇蹟が如何なる作品にも見らるゝ。併しこの愛は、マアテルリンクに見る靈の覺醒、平等世界の交霊といふよりは、カトリック傳統の愛の力である。個々人に目醒めたる力であるよりは、傳統に統一せられたる愛の力である。詩人が宇宙に秩序を與ふるものであるといふ彼の觀念は、佛蘭西人に通性な、統制力構成力が、カトリックの愛と結合して生じて來た現象である。そして中世紀の信仰が直ちに二十世紀へ持ち來たされた如き、卒直な、純眞な、一意の信仰が生きてゐる劇作家は、「聖女セシルの三奇蹟」や「陛下の老人」などの作家、アンリ・ゲオンである。

この種の劇に續いては、詩劇或ひは詩人劇を考ふべきであらう。エドモン・ロスタン (1838—1920) の「シラノ・ドゥ・ベルジュラック」、「レエグロン」、「ジャントクレエル」は新浪漫劇ともいはれ、「ジャントクレエル」はマアテルリンクの「青い鳥」の一層大仕掛けのものであり、暗喩的ではあれ、強く生きる本來の佛蘭西魂を示すものであり、「シラノ」は、特にその代表者を十七世紀の史的人物に求めたのであつた。「レエグロン」にいたつては、七十年戦後の佛蘭西人の涙をしぼらせたものであらう。特に彼の劇作を光りあるものにしたのは、近代の名女優「不思議な女王」といはるゝサラ・ベルナアルの

演出が力あるものである。恐らくこの名女優によつて佛蘭西古典劇、殊にラス・ヌの悲劇が如實に再興せられ、若い人々を鼓吹し、ロスタンはこの人によつて自作の絶妙な表出者を求め得たのであつた。詩劇の作はジャン・モレアスの「イフィジエニイ」、アルベール・サマン、ヴェルレエヌ、ヴェレアランなどにもあり、その他に相當の數を示してゐる。ポアザ、ザマイイス、アンドレ・リヴェアル、ボルシ等の作家がある。

自然主義劇の系統を受けついだのは、アントワヌが自由劇場レテアトル・ライヴルを創設し、アンリ・ベックを中心置き、それに外國劇、ビュルソン、イブセン、ストリンドベリ、ハウプトマン、トルストイ、などの作品を紹介上場し、これにはゾラなども注意を與へて、やがて自國の新人等を其處で紹介するやうになつて來たなかに、存續してゐる。この自由劇場で第一に紹介せられた人は、フランソワ・ドゥ・キュレルである。そして、彼より引きつゞいて、所謂社會劇と呼べるゝ作家が出來たのである。

アントワヌのこの「自由劇場」と、ルニエ・ボオの「創作劇場」と、ジャック・コボオの「ヴィウ・コロンピエ」劇場と、「グラン・ギニョル」劇場と、「藝術座」とは共に、佛蘭西現代劇の發生搖籃場といつてもよからう。

フランソワ・ドゥ・キュレル (1854—) は、最もよくイブセン劇を取り入れてゐる人である。彼の作品は凡そ三様に區分がつけられる。第一は家族悲劇である。舊家の中に起る傳統遺傳、或ひは信仰とその反面の現はれの如き、例へば「化石」とか、「聖女の反面」などの如く、キュレルの作品で最も藝術的な完成



したものである。第二は所謂社會劇の名にふさはしい、「獅子の饗宴」とか、「新らしき偶像」とかいふ類で、大衆と個人、集合人と組織の關係を取扱ふもので、「獅子の饗宴」では、労働者の味方、労働者の鼓吹者が、自ら資本をもつて工場組織を經營して行く主題であり、「新らしき偶像」は、多數者の健康を増進するために、我から進んで、身を犠牲にする或る醫者の心事を取扱つたものである。舊貴族、地主たる作家の現代の社會問題に對する解釋を見せてゐるものである。「最も強き人間が死體の撒き散らされてゐる路を踏んで行く」のである。これ等の犠牲なしでは人生の新路は拓かれぬ、同時にその路を踏んで行く強き人もまた自身を犠牲に供するのである。「獅子の饗宴」のジャンも、「新らしき偶像」のアルベール・ドンナもさういふ人物である。第三種のキュレルの劇は、例へば「野性女」の如き、人類の進化に關する問題、或ひは植民地問題などの如き、一種の問題劇である。彼は作品數は全體として十三四篇にすぎないが、一作毎に、作者が十分の用意をもつて書いたものであるといふ力強い感じは與へらるゝ。

ウジェヌ・ブリュウ(1838—)、キュレルの貴族出に比すれば、この作家は勞働階級出身の作家であり、その社會批評には皮肉味、深刻味が相當に行き互つてゐる。その點が英國のバアナアド・シオなどをいたく悦ばせた點ではあるが、依然として、高級ブルジョワ生活に對するアテ・ブルジョワの立場からの批評であつて、社會全體に關する批評でもなく、階級的な批評でもない。即ち日常生活の身邊的事象に於ける缺陷の指摘或ひは皮肉が多く、またそれに對する手輕な解決を與へようとする批評である。

原則的社會批評家ではない。場當りになる場合が屢々ある。併し第二流作家の特色たる當代の俗生活様式の如實な描寫は極めて確かなものである。田舎でも都會でもの正直な労働者、小資本で暮して行く商人、學校教師、辯護士、醫者などの生活相は全く完全、全く客觀的に示されてゐる。「女ひとり」は、現代社會に於ける獨身女の生活を描き、それを通じて社會相を示すものであり、彼の代表作の一つである。「ブランシット」、「ル・ブルジョワ」、「佛蘭西に於けるアメリカ人」、「辯護士」などいづれも相當の成功ををさめてゐる作品である。

オクタヴ・ミルボオ(1838—1917)、ミルボオは怪物だといはれる。皮肉な社會批評はブリュウに較べて遙かに深刻だ。「小間使ひの日記」はトルストイが書を送つて推賞したものであり、バルビュスの「地獄」に較べて見て面白い作品で、「人間たることの悲しき滑稽さ」を示す物語である。「セバステアン・ロック」もさうである。「醜惡の至高美」を示すものであり、言はゞデカダンの傾向の最も強い人であり、従つて主觀的デカダンでなく、社會的デカダンと言つてよからう。その傾向が初めてマアテルリソクの處女劇「マリイ・マドレヌ」を巴里へ紹介して白身義のシクスピアとまで推賞したのも彼である。「哀願者の園」もデカダンの物語、生も死も同一である姿を示す。「ダエンゴ」は犬から見た人間生活、「惡指導者」は彼の無政府主義的傾向を示すものであり、「仕事は仕事」は彼の代表的劇作である。革命的労働者、不決斷な工場主、理想主義的若いブルジョワの紛糾した生活、神祕と革命との混合交叉である。この劇で彼は、自分の嫌つてゐるもの盡くを盛り上げてゐる。ブルジョワジイの残忍性、



唯我主義、場當りの社會主義、すべてを引きくるめた醜い集團生活の描破である。社會的デカダン、或ひはアナルシククの傾向表出としてはこの劇作は上乘のものであらう。

エミール・フープルもまた社會劇作家である、政治家、政治家の腐敗生活を忌弾なく描破する「金」、「公共生活」、「大ブルジョワ」などが傑出した作である。

次には、心理劇の作家達である。これはその取材の方面から言へば、前時期即ち第二帝政期の所謂「ブルジョワ劇」のひきつゞきであり、その心理解剖が一層微妙細密になつて來た心理解剖劇であり、形式からいへば古典劇の連絡をたどり、單純で、明るく、秩序ある、運動迅速感の伴つてゐるものである。古典劇は王宮内の貴族等の情熱心理の葛藤解放で人生を示し、現代心理劇はブルジョワジイの内經過を描破して現代生活を示さうとしてゐる。モオリス・ドンネ、殊にポルト・リシュの如き人々のなかにラスィヌは生きて呼吸し、タウルトリイヌの中にはモリエルの面影が浮び上る。

心理劇作家の中では第一にボオル・エルヴィウ(1857—1915)である。彼は前代のエミール・オオジエの系統をひいてゐる。彼の劇作の特色は人物事件の排列のいかにも氣持よくなされてゐる事であり、そしてそれ等の人物の心理と、事件の論理的發達とによつて、いかにも自然な結論へ劇作を導いて行く巧みさである。彼の人物は個性を備へてゐるといふよりは、或る種の同じ經驗をした人々を代表するやうな典型人物になつてゐるといふ感じがする。その點で彼もまた佛蘭西人本來の特色を示してゐる作家であり、又その點が古典劇とも通ふ一派のつながりを示すのであるが、注意すべき點は、古典

劇に現はるゝ王宮生活は、當時に於いて他にない唯一の情熱の醗酵場であり、自由な奔放な情交生活場であり、しかもそれを醗酵するに到らしめない一種の取押へる制限する理智の命令が強く動いてゐた。それ故、その情熱をくくり上げて、遠心力と求心力との合致から彼に見る如き典型人物を作る事が出來たのである。現代に於いては、情熱は必ずしもブルジョワジイの生活に現はるゝのではない。或ひは現代生活の情熱が異つて來てゐるといふ可きであらう。従つて在り場所も異つて來てゐるかも知れぬ。然るに今日のブルジョワジイの生活からその情熱心理の解剖から、無意識にもせよ、典型を作らうとすれば、最早やブルジョワジイに限られたものになるか、或ひは影の薄い典型が出來上るかである。現代の心理劇が、その形式手法で古典劇の呼吸を示してゐても、そしてその單純さ、明るさ、朗さで、爽やかな感じを與へてゐながら、何となく柔かで、氣薄で、何處となくたよりない、古典の遠い投影といふやうな感じのするのは、やむを得ない事ではあるまいか。「人のおきて」、「エニグム」、「迷宮」、「目醒め」などはいづれもエルヴィウの傑作であり、「炬祭り」はその代表作の一つである。家族問題、財産問題、後繼問題などはエルヴィウ劇の主材である。

モオリス・ドンネ(1858—)は純粹の巴里人であり、「リジストラタ」は快活な笑ひをもつた喜劇であり、「戀する人々」はラスィヌの「ベレニス」に較べて、小さきベレニス、即ちベルニセツトと呼ばれるゝ作である。「苦しむ女」はどん底生活に置かれた一人の女性を描き、「流れ」は夫に強ひられて姦通する女性を示し、「最一つの危険」は、母親が自分の戀人を娘の夫とする劇である。彼はモリエルを深く



研究し、「モリエルの家庭生活」の劇作もある。

アンリ・ラヴダンはまだ現代描寫、肖像描寫のすぐれた作家であり、印象批評家ジュール・ルメエトルは、その批評にも劇作にも同じ態度を示す、彼は「ハムレット」劇に對しても、モリエルの「嫌人家」に對しても、全く、今日はじめて作り出されたものに向ふ如き心境で對する。ラスヌに對しても、ルウソオに對しても、先入見を持たずして向ふ人である。直感を先にして周圍條件の解剖を後にする。彼は結論から始まる。ブリュヌティエルは平押し論理家的批評家であり、ルメエトルは直感と印象とを先にして解剖をそれにつける。その批評の態度は劇作にも示さる。彼の處女作「反抗者」は、恐らくイブセンの佛蘭西の第一の影響でもあらう。「人形の家」と同じ主材である。六七篇の劇作には「王者達」が代表作であらう。現代に於ける王者等の化石の如き、太古遺物の如き生活を取り扱つたものである。全體として人生の清新な印象を劇的構成に仕上げたものである。知識階級の劇作である。

心理劇の中で、特に戀愛を主として取り扱ふ人々を戀愛劇作家達と分類するのが普通である。アンリ・パタイユ、ポルト・リシ、ベルンスタエンその他の人々である。

ポルト・リシ(Poitevin)は、ラスヌ、マリボオ、ミユッセと、系統をひいて來てゐる戀愛劇の現代及び佛蘭西文藝を通じての代表者の一人である。戀愛の網の中で喘いでゐる人間に生命を與へてゐる作家である。但し彼の取り扱ふ戀は、自然主義以後の肉の戀、理想なき戀である。ラスヌの必死な情熱

の戀、マリボオの優艶な幾分戯れの戀、ミユッセの清新なロマンティックの戀、そしてポルト・リシの肉と情みの戀、「死に導く戀」、時代の相はいづれにも端的に反映してゐる。彼の「不實者」、「戀する女」は戀の容赦なきエゴイズムを示し、「過去」では人間のドン・ジュアン性を現はし、「昔の人」では老若の戀の争ひを見せ、「版畫商」では愛人の中に、夫妻が共にセエヌ河へ投身する姿を描きいだす。世話物であり、喜劇でもあり得るものを、嚴肅な悲劇に見せ、その行進も、開展も、又調も全く彼獨特な柔かな、明るい、そして引きしめる、如何にも藝術的單純性を示してゐる。置き換へ難い完成品である。

彼については、アンリ・パタイユ(Henri Patey)である。ドオデと同じく南方の人であり、柔かな素樸な本性を持った作家である。彼の扱ふ戀は、良心も熱情も何とも出來ぬ、デカダンの極致を示す。不幸で不可抗力を持つ戀、——騒がしく、おしやべりで、卑俗で、そして全體として性的どん底生活の畫圖を吾々の前に展開する。部分的皮肉批評は示さないが、その全體が極めて深酷な現代批評になつてゐる。「ママン・スリブリ」、「裸形の女」その他の諸作。次はベルンスタエン(Bernstein)である。殆ど人間野性の解放を見るが如きが彼の作品である。「サムソン」を代表作とする。

次は喜劇作家等である。第一にアルフレッド・カピュスをおける。ルメエトルの批評によれば、彼は稀れなるレアリストである。自然主義のまじらない、悲觀もしない、わざとらしさもない、物を茶化したり、皮肉に見たり、冗談化したりはせず、また心理解剖に陥ることもなく、人々を泣かすやうな野心も持たず、全く平靜で、明徹である。そして彼の取扱ふ材料は、極くありふれた、日常生活的事件



である。かゝる現實は華々しい輝きはないが、人間生活と共に存在する。その平凡事を劇化し得る彼の才能は、要するに常識の最も發達した、經驗のひろい、そして人間生活の或る場面を一網に打つてまとめる包括力を持つた人である。そして智的階級獨特な、一種の上品さ、氣高いとはいはず、力強いとはいはれないが、抜目なき、細かな心の働きて、こたはず、自在に、深くはないが、可成り廣く、様々な世相を扱ひながら十分に單純化して行く、上乘のブルジョワ喜劇作家である。フリニョルとその娘、「ビエゴワ氏」、「二つの學校」などが彼の代表作である。クルットリヌ(Crozier)は現存作家中、最も喜劇的佛蘭西の傳統をつたへた傑出者である。軍隊生活劇、小ブルジョワ生活劇、法律生活劇、彼は喜劇の中で眞實を示すといふよりは、眞實の中の喜劇要素を探す人といふべきである。フプロシユ、「酷い憲兵」、「彼の家の平和」などが、代表作である。トリスタン・ベルナルは、現代のハムレット型の人物を屢々描出する。何をなすべきか、何を望むべきかすらも知らない人を點出し、事件も、有るべき事の反對な、有るべからざるものを持ち出して來る。「知らぬ踊り手」、「奇を好む女達」などの作品がある。その他に、アルフレッド・シャリイ、ピエル・ヴェベル、アレクサンドル・ブリッソン、ジョルジュ・フェドオなどの作家等を、擧げることが出来る。この種の劇の中で最も人々に悦ばれ、人氣あるのはフレネル及びカイヤヴェの兩作家の合作劇であらう。前代のメイヤック及びアレヴィの如きものである。この二人とも最初は歴史家たらんとして同じ學問に向ひ、やがて二人ともそれを捨て、喜劇に向つた。合作は佛蘭西文學の特色の一つである。小説に劇に、その例は幾らもある。彼等は二

人で、如何なる種類の人物でも自由に選擇して、劇化する。巴里人が尊敬するやうな人物でも一向容赦はしない。二人は、一方がプロットを考へて提出する、と不思議に他方がそれに同意する。對話になれば、それ／＼二人で役のせりふを口にする。それで、一人の作家のやうで、同時に二倍の活力が使用せらるゝ。二つの眼で見ることを四つの眼で觀察する。一事象を兩面から見ることも出来る。かくて合作は完全になされると、カイヤヴェ自身はいつてゐる。彼等は複眼の社會批評家である。其處で彼等の劇作を見ると、戀愛を主としたものと、政治を主としたものと、いづれも一般の關心する事多い事象を取扱つてゐる。彼等の作に人々は最も適度に笑はせられる。安心して笑ふことが出来る。確かに笑つてさしつかへないといふ感じがする。同時に彼等の作はいづれも讀むものといふよりは見るものである。「王」、「ババ」などが、その代表作である。





佛蘭西文學概觀

著者

吉江喬松

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

昭和八年四月一日印刷

(定價三十錢)

昭和八年四月十四日發行

東京市牛込區矢來町七十一番地

發行所 新潮社

電話牛込 八〇〇五番 八〇〇六番 八〇〇七番 八〇〇八番 八〇〇九番

振替東京 一七四二番

東京市小石川區江西戶川町 富士印刷株式會社印刷



# 新潮文庫

・郵送料は  
 二百四十頁まで……………四  
 四百二十頁まで……………六  
 六百頁まで……………八  
 銭 銭 銭

藤島村崎著 (2)(1)	寛菊池著 (3)	芥川龍之介著 (4)	江戸川乱歩著 (5)	下村秋著 (6)	島田次郎著 (7)	小喜林著 (8)
小説家 (上・下)	小説勝敗	小説羅生門	小説パノラマ島奇談	小説天國の記録	小説地 上第一部 (地に潜むもの)	小説蟹工船・不在地主
廣く深い時代の反映を示したる驚異的な大長篇小説である。	階級闘争を愛慾の世界に描いて現代社會の一断面を暴ける傑作	著者の代表的名作「羅生門」「鼻」「芋粥」等々以下十數篇を收む。	花は咲き鳥は歌ふこのパノラマ鳥は残忍な血にまみれてゐる。	作者が血と涙をもつて語る魔窟に喘ぐ女たちの哀しき種々相。	稀世の天才兒が灼くが如き情熱を迸らして天下を驚倒させた作	波荒き北海の蟹工船を描いて嘗てなき反響をよび起した小説。
上234頁 下274頁 各30銭	420頁 45銭	162頁 20銭	146頁 20銭	160頁 20銭	302頁 25銭	246頁 30銭

吉田二郎著 (9)	吉松江著 (10)	千葉雄著 (11)	木村著 (12)	相田隆著 (13)	近藤浩一著 (14)	近藤浩一著 (15)	ソラ高伸一著 (16)(17)	モオバツサン廣津和郎譯 (18)
感想集 小鳥の來る日	研究 佛蘭西文學概觀	研究 現代世界文學概觀	研究 小説研究十二講	解説 テクノクラシー	漫畫 坊っちゃん	漫畫 吾輩は猫である	ナ ナ (上・下)	女の一生
暴風的の賣行きを示し今尙ほ讀者の絶えざる著者唯一の感想集	單に文學の消長に止まらずよく文化の生成進化に及ぶ文學史。	正確平明悉 描かれた世界文學の現状はこの一書により明瞭だ	何人も直に理解出来る小説入門書であり權威ある研究書である	今や全世界を襲ひつゝあるこの思想を知らずに近代は語れぬ。	畫と文と併せ見て新たにかの名作の眞骨頂を窺ひ得べし。	漫畫に含める酒脱味の極致、そこに溢るゝ人生の妙味。	淫蕩な一女性を中心に混沌たる世相の断面を見せた暴露小説。	清純な處女が歌的な男のため終生暗黒な生を送る悲劇を描く。
277頁 30銭	286頁 30銭	120頁 15銭	326頁 35銭	140頁 20銭	280頁 30銭	200頁 25銭	上40銭 下35銭	354頁 40銭



630  
8

次 同 刊 行 定 豫		山内義雄譯	飯田敏雄譯	相馬御風譯	トルストイ 田中純譯	トルストイ 田中純譯	ツルゲエネフ 生田春月譯		
芥川龍之介著…傀 師	吉田絃二郎著…無 限	久米正雄著…破 船	久米正雄著…破 船	菊池 寛著…青 春	島崎藤村著…春 會	米川正夫譯…父 と 子	米川正夫譯…白 痴(一・二)		
以下續々刊行	堀口大學譯…夜 ひ ら く	大杉生田譯…懺 悔 錄(上・下)	森田草平譯…デカ メ ロ ン(上・下)	米川正夫譯…白 痴(一・二)	米川正夫譯…父 と 子	米川正夫譯…白 痴(一・二)	米川正夫譯…白 痴(一・二)		
					モンテ・クリスト伯	サイラス・マアナー	性 慾 論	人 生 論	初 戀
					第一卷はダンテス投獄迄を第二 卷は囚人の戦慄と脱獄への波瀾	女に裏切られた男が一少女の愛 に眞人間に返る経路を描いた。	靈と肉の慾求に悩めるト翁が、 如何に此の問題を觀じたか？	豊かな比喻と鋭き筆を以て説き 去り説き來る大ト翁の人生觀。	心深く秘めた初戀の人は父の情 人であつた、少年の日の儂い涙。
					1卷390頁 2卷400頁 各45錢	296頁 35錢	120頁 15錢	174頁 20錢	192頁 20錢





文西閣佛

30



630
8



終

